川柳の雑誌

麻生路郎★主宰

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和十七年五月一日發行 第十九卷第五號
（毎月一回一日發行）

五月號

Pensoj flugas trans la land-limon

ニキビ

りとびきに

美顔水

の等虫京南・蚊・蚤
！時いユカて虫毒

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

★ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の藥です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！　ゼヒお勸したい藥です！

是非此藥	吹出物に	ニキビ・

東京・大阪

桃谷順天館

ニツポン語の南進と川柳

麻生路郎

日の丸の旗の進むところニツポン語も又進むといふ譯で左に掲げる約三百の簡用語が四月一日に情報局で決定され南進することとなつた。

哲井福　影撮（健五田前）力角腕も法兵つ勝てしは笑

情報局選定　ニツポンゴ

第一類　ニツポン、ニツポンジン、ニツポンゴ、ヒト、オトコ、オンナ、コドモ、オトーサン、オカーサン、キヨーダイ、シユジン、オクサン、トモダチ、オキヤクサン、アタマ、カオ、メ、ミミ、ハナ、クチ、テ、アシ、ワタシ、アナタ、ダレ、ナマエ、サン、ミル、キク、ユー、トル、タツ

第二類　ウチ、ヘヤ、マド、ト、カギ、イス、ツクエ、ベンジヨ、ソージ、アケル、シメル、スワル、オキル、ネル、コメ、ゴハン、パン、ニク、サカナ、タマゴ、ヤサイ、クダモノ、ミズ、コーリ、ユ、オチヤ、シオ、サトー、カシ、サケ、タバコ、ヒ（火）、マツチ、セキタン、セキユ、ニル、ヤク、タベル、ノム、チヤワン、ハシ（箸）、サラ、コツプ、ナイフ、ホーク、サジ、イレモノ、アラウ、キモノ、オビ、シヤツ、ボタン、ボーシ、クツ、クツシタ、キレ、ハリ、イト、ハサミ、テヌグイ、キル（切ル）、セツケン、キル（着ル）、ヌグ、ハタ、ホン、シンブン、カミ、エンピツ、ペン、インキ、エ、シヤシン、ジ、ヨム、カク、ミセ、オカネ、ウル、カウ、シゴト、アツブ、ビヨーキ、イシヤ、クスリ

第三類　イチ、ニ、サン、ヨン、ゴロク、ナナ、ハチ、キユー、ジユー、ヒヤク、セン、ーン、ーネン、ーガツ、ーニチ、ージ、ーフン、イクラ、ミンナ、タクサン、スコシ

第四類　キヨー、キノー、アス、アサ、ヒル、ヨル、イツ、マダ、アトデ、ツギ、トケイ

第五類　コレ、ソレ、ドレ、ナニ、ココ、ソコ、ドコ、ウエ、シタ、マエ、ウシロ、ミギ、ヒダリ、ナカ、ソト、ヒガシ、ニシ、ミナミ、キタ

第六類　イヌ、ネコ、ウマ、ウシ、ブタ、トリ、ハイ、カ、キ、クサ、ハナ、タケ、ヒ（陽）、ツキ、アメ、カゼ、ヤマ、ウミ、カワ、モリ

第七類　ユービンキヨク、テガミ、キツテ、デンワ、デンポー、ラジオ、エキ、キシヤ、デンシヤ、ジドーシヤ、ジテンシヤ、フネ、キツプ、ノル、オリル、トマル、ニモツ、ミチ、ハシ（橋）

第八類　マチ、ムラ、ヤクシヨ、ケーサツ、ジユンサ、ギンコー、カイシヤ、コーバ、ガツコー、オテラ、キヨーカイ

第九類　リクグン、カイグン、タイチヨー、ショーコー、ヘータイ、ケンペイ、グンカン、ヒコーキ、センシヤ、ホー、ジユー、センソー、テキ、ミカタ、メーレー、カツ、タスケル

第十類　イー、ワルイ、オーキー、チーサイ、ナガイ、タカイ、アツイ、ハヤイ、ツヨイ、ヨワイ、オモイ、カタイ、トーイ、アタラシー、シロイ、クロイ、アオイ、アカイ、キーロイ、オナジ、ホントー、スキ、キライ、キレー、イタイ、アブナイ

第十一類　アル、ナイ、スル、イク、クル、アツマル、ハイル、ダス、モツテユク、ワカル、デキル、コシラエル、ナオス、ヤメル、シヌ、マツアゲル、トブ、ヨーイ、チユーイ

第十二類　ハイ、イーエ、コンニチワ、オハヨー、サヨナラ、クダサイ、アリガトー、バンザイ

第十三類　・・ト・・、・・ノ・・・・カ（疑問）・・ナ（禁止）

これだけあれば一寸した用事は足りる。なか〳〵うまく選定してある。關聯して必要な單語はすべて一つところに蒐めてある。デキとミカタの如く、反對語を掲げてあるのもあるが、アブナイがあつてアンゼンは省いてあるのもある。アンゼンは否定語を、くつつけてアブナイナイと云へば通じるからであらう。一切文法などに拘泥せず、棒ひき假名による發音通りである。すぐ役に立つ日本語といふ感じが、ヒシ〳〵と迫つて來る。これ等約三百の簡用語を先陣に約二千の公用語が第二陣として選定されつつあるそうである。

斯くして第三陣、第四陣と引續き日本語が南方諸民族の間に擴がり、遂には日本語を通して日本精神、日本文化の全貌に接するであらうが、主として現代口語で創作され、しかも僅に十七音字中心の短詩川柳の南進こそ、皇國日本の風俗・人情・習慣をもつとも剴切に、もつとも深酷に、彼等に味到せしめる大きな役割を持つものではなからうか。

★豆ニュース★

★米機初めて本土を空襲、損害輕微（四月十八日）

★大東亞戰爭下に衆議院議員の總選擧を推薦制で敢行（四月三十日）

異色ある新人の登場と舊社大系の沒落によつて翼賛選擧に凱歌があがる

棄權率減少。

藥師寺の三重塔

川柳の近畿 大和篇（三）

麻生路郎

（五）唐招提寺

★唐招提寺は關急西の京驛を下車、北へ二丁のところにあつて律宗の總本山である。我國での最初の律宗寺院であるところから一名建初律寺とも呼ばれてゐる。

★聖武、孝謙兩天皇の勅願で、天平寶字三年八月、唐僧鑑眞が新田部親王の舊宅を賜つて弟子二十四人と共に創建したのである。

★鑑眞は嗣聖五年卽ち持統天皇の卽位二年に、楊州江陽縣、今の江蘇省淮楊道江都縣に生れた。鑑眞が渡海の動機は天平五年に派遣された留學僧で、興福寺の榮叡、普照等の懇請によつたものである。鑑眞は前後五回の渡海を企てたが、何れも意外の故障で失敗に歸したが盲僧の身をもつて更に屈せず、天平勝寶五年十一月十六日に大海へ乘り出し二十一日に阿兒奈波（沖繩）に着き十二月二十六日に大宰府に入つた。時に鑑眞は六十七歳の高齡で第一回の渡海の失敗から十二年目であつた。

★鑑眞が天平勝寶六年四月東大寺大佛殿の正面に築かれた戒壇で、聖武天皇、光明皇太后、孝謙天皇の御三方に菩薩戒を授け奉る光榮に浴したことは續日本紀に特記されてゐる。

★鑑眞が東大寺の戒壇を離れて今の唐招提寺の地に自分の寺を創立したことは悲しくも弟子達の間に精神的分裂があつたことに起因するとされてゐる。

★建立緣起によると寺地は右京五條二坊の地で、東西四丁、南北三町である、東西北は各大路に接し南は五條大路の北一町の小路を境としてゐた。

★金堂、講堂、東塔（西塔はない）廻廊、鐘樓、經樓、僧坊、食堂戒壇其の他の雜舍が甍を連らね、戒律の學問寺として天下に重きをなしてゐた。

★創立當時のもので殘つてゐるのは正面の金堂、その裏の講堂（本尊彌勒）寶藏、經藏であつてその他は再建で東側に鼓樓、舍利殿（本尊佛舍利三千粒）と禮堂（本尊釋迦）との一棟、北に開山堂（乾漆像安置鑑眞）西に鐘樓、戒壇址などがある。開山鑑眞の墓は寺の後方にある。

★唐提招寺では有名な「團扇まき」行事が恒例によつて五月十九日に執行される。この日に梵網會といふ佛事が嚴修され、その行事の一部として團扇まきが行はれるのであるが、東大寺二月堂の修二會が、「おたいまつ」の名で人口に膾炙してゐるやうに、唐招提寺の梵網會も一般には「團扇まき」として知られてゐる。この行事

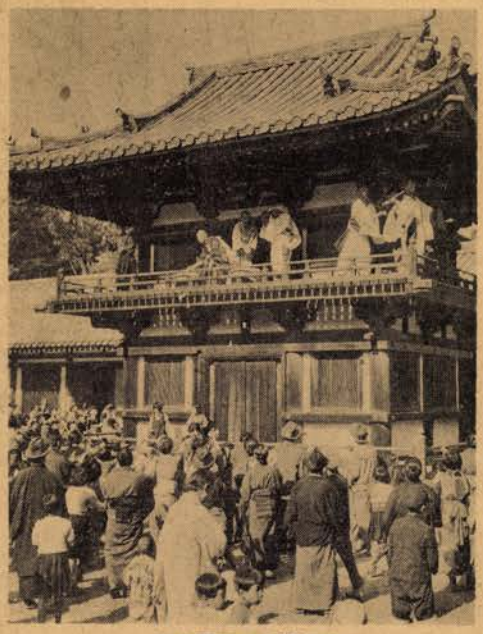
川柳雜誌 五月號目次

表紙……（パリ島の婆羅門教鬼面獸の洞）
ニツポン話の南進と川柳……麻生路郎……（一）
川柳寫眞（腕相撲）カメラ福井哲・句—前田五健……（一）
川柳の近畿 大和篇（三）……麻生路郎……（一二）
隨想・丹波の狐……小山文三……（一三）
武玉川四篇研究（三〇）……梅本塵山 森東魚 蛭子省二……（一四）
變り種の川柳家……麻生路郎……（一五）
初等川柳講座（四）……麻生路郎……（一六）
旅から……寺井鋭々……（一七）
川柳世界史（一三）……戸田孤鐘……（一三）
榮闘雜……長野文庫……（一三）
中堅作家に聽く……黑川柴香 東西尾 阿蔦鈴木 万笑石 奥村鹿 丹路玲之介 浪介 麻生アート……（一〇）
「川柳雜誌」のどんな點に魅力をもつか
投句會吟の個性に就いて
投句以前に於ける自選の心構
第四回西日本鐵道人川柳大會……（一六）
川雜津山支部創立句會……（一七）
隨組のためのお座敷芝居
川柳劇 熱……小畑自有浪……（一三）
★
近作柳樽……麻生路郎選……（一八）
川柳塔……麻生路郎選……（一四）
同舟近詠……諸家……（一五）
一路集 農村……戸倉曹天……（一八）
漁村……濱田久米雄……（一八）
各地柳壇……（一三）
川協・柳界展望……（二〇）七號字數記……（一八）
社關係の人々……（二〇）
川柳書架（八三）……（八）川柳類題索引……（一八）

は當日寶前に供養した團扇を法要のあとで僧衆の手で高所から撒布するのである。團扇は大小二種の心臓形に出來てゐて、小形の團扇の表には梵字が印刷されてある。大形の方は知名の士の詩文の揮毫で興味をそそつてゐる。參詣の人達は爭つてこれを拾ひ諸願のお守とするのである。「團扇まき」行事の由來は、律宗中興の祖である覺盛和尚が、禪室にあつて蚊虻の來襲する中に端座し、檀婆羅密を行じてゐられる痛ましい尊い姿に弟子達が團扇で、それをはらおうとするのを、和尚がこれを制止されたので、和尚の滅後、その高德を追慕のあまり忌日には受戒の弟子たちを中心に由緣の僧が集つて手作りの團扇を寶前に供養してゐたところ、いつのほどか、この團扇をお守とすれば諸願が成就するといふ信仰説が傳へられ、授與を乞ふものが多くなつたので、毎年梵網會を修した後、一般參詣者に撒布授與することになつたものである。この團扇で病人を煽ぐと、病氣が平癒するとも云はれてゐるが保證の限りでない。なほ團扇以外に餅もまかれてゐるのを見たが餅はいつもまくのかどうか知らない。

★今人の詠んだ「團扇まき」の句を左に掲げることとする

團扇まき女の方へたんと投げ　絲雨
くらしとは別に餅まき拾ふなり　同
團扇まき賽錢あげぬのもまじり　美奈子
うちわまきバレーボールの型でうけ　同
足きつう踏まれて團扇拾はれず　同
招提寺あまりにむごい試錬にて　路郎
西の京心しづかに風を戀ひ　同
遺髮つぐ弟子へほほえむばかりにて　同
團扇まきこの邊といふとこに立ち　同



唐招提寺の團扇まき

（六）藥師寺

★藥師寺といふ名の寺は天武朝以降諸所にあつたが、ここにあげたのは奈良市西の京にある藥師寺で唐招提寺の南約四町のところにある。電車は唐招提寺と同じく西の京停留所に下車すればよい。

★天武天皇の白鳳九年十一月十二日、皇后不豫の御平癒を祈らせ給ふため天皇親ら金銅丈六の藥師像を鑄奉らうと誓願させられたのであつたが鋪金の成らないうちに、即位十一年で崩御あらせられた。よつて皇后登祚（持統天皇）前緒を繼ぎ、その年に像全く成つて開眼、次いで文武天皇二年に諸堂成就し藥師寺の寺號が定まつたのである。

最初の寺地は天武天皇の都し給うた飛鳥淨御原宮の附近、高市郡岡本の地にあつたが、元明天皇和銅三年に都を平城に遷されたので、大官大寺なども、これに隨伴して飛鳥の地をはなれ、それ〴〵新京所定の地に移遷した。その際、藥師寺も、これと歩調を一つにして平城京の右京六條二坊の地に移つたのである。尤も寺の移遷といふのは寺號だけで建築物や佛像などはそのまま飛鳥に殘つてゐたので、新京の藥師寺に對してそれを本藥師寺と呼んでゐた。しかしその本藥師寺阯は今は不明である。

★左に主要な伽藍とその佛像を列擧して見やう。

緣起に「金堂一宇、二重二閣五間四面、長七丈八尺五寸、廣さ四丈一尺、柱高一丈九尺五寸、佛壇長三丈三尺、廣一丈六尺、高一尺八寸」とある今の金堂は文安二年燒失後再建、慶長二年再び燒失、同五年再興したもので其の位置や柱間等はほぼ舊態を保ち、正面九間側面六間の柱間を數へ本尊及び脇侍と、その須彌壇には災火の跡が歴然としてゐる。本尊は藥師如來で脇侍は日光月光兩菩薩で何れも金銅である。本尊の臺座に葡萄模樣のあること、蒼龍白虎朱雀玄武の所謂四神の形のあること、奇怪な鬼形のあること、それから須彌壇が大理石造であることなど注目に値する。

★三重塔は高百十一尺、各層に袴があるので昔から六重塔と云はれた。元來東塔であつて、頂上の水煙に天人の飛んでる形があるのは他に類がない。東院堂は東禪院堂ともいひ、主要伽藍とは關係がない。本尊は聖觀音で銅造の立像である。百濟王の献納と傳へてゐるが端嚴優麗である。

★鐘樓の鐘はこれも百濟王の献上で袈裟形が非常に廣い。

★佛足堂には釋迦の足の裏の形を筋彫にしてある國寶の佛足石とそれに關する奈良時代の和歌十七首を刻んだ歌碑とがある。佛の足跡を彫んでこれに敬禮する風習は古くから印度で行はれ「觀佛三昧經」などにも見えてゐる。これは釋迦の入滅後にその足跡を石に刻んだことから始まり、それを支那でも轉寫して諸寺に安置恭禮するやうになつたのが更に我が國へも傳來したのである。藥師寺の佛足石は石の前面に誌した文章によつて唐の王玄策が印度から複寫して來たものを、わが國使黃書本實が、さらに唐の普光寺で轉寫し、これを右京四條一坊の禪院に遺しておいたのを、その檀主である文室眞人智努が天平勝寶四年に亡夫人菩提の意から、また更に石に刻まし たものである。

★藥師寺を詠んで今人の句を左に。

末の世は末の世なりに藥師坐し　路郎
佛足石自分の足にひきくらべ　同

川柳塔

=路郎選=

茶の庭へ椎茸培養木並べ
リュクサック背負へば子供足早し
末つ子はリュックのまゝで寢て歸り
夫婦とも小言の多い隣なり
配給所で鮪裂いてるのは見たが
亭主買うて歸れば内にも同じ罐
衣料切符何んの姑手離さず
大社長禿げ給へども脂ぎり
國民服着てゝも舊い頭です
重役の客間銀瓶まだ光り

戸屋 寺井鋭々

小腸の樣な結髪史の挿繪
大將の夢も見なんだ九勇士
回轉椅子なんぼ云うてもよじのぼり
うちの猫殺されそうな猫の戀
りんがなる途端にすてる標準語
晝見れば島田は少しゆがんでる

大阪府高石町 戸田孤篷

國防服へミシンの糸の細かりき
新緑にはつきり見える鬼瓦
目がこえたネとにがい茶をのまされる
片隅にちよこんと自我をすてゝ待ち
春の海くらげへ石を投げてゐる

尼崎 水谷鮎美

古着屋のマントの歴史誰ぞ知る

兵庫縣 西川青美

落下傘走るところを見て戻り
バタ臭い奴等をすみつこへ押しやるぞ

大阪 橋本綠雨

南方占領地のサービス
踊子の肌が黑いとも云へず

横濱 福田山雨樓

板橋監察官榮轉（二句）
榮轉を追つかけてゆこ碁の敵
榮轉の次には家を買ふ話

親戚の水内夫妻逗留
新妻があり家の中うつくしき

長男幹部候補生となる
星二つこんなうれしい便りです

般若心經講義をよむ
散の花の姿心經やどるなり

尼崎 奥村丹路

おしやれにはあらずいたはる靴の疵
鳥籠を清めいよ〳〵捷ちいくさ
境遇に少し甘える誕生日
十二月八日以來の米の味
車内隣組何かこそぼう本を讀み
如何に生き如何に死すべきかは言はず

あるものは子に食べさせて母尊と
こまごまと書く家計簿をのぞきこみ
カンシヤクもまじり金鎚首がとび

張家口　岩崎柳路

花曇り南へ行ける友のごと
立膝の向う座敷に春の人
情報を賣りに來たのが混血兒

★

坊さんが信號無視をして行つた
純綿のおむつ社務所へ忘れて來
つんとした鼻に金絲の着物きる
おやおやなんどと子供がませてくる
爪なんか染めて大根きれますか
お話中ですがと虫の好かぬ奴

西宮　谷口綠葉

士農工商昭和の御世で振り返り
夕刊を賣る眼も光る勝ち戰

大阪　武部香林坊

四月八日海軍葬

大君のみたてとなりて若櫻

吉野懷古

如意輪堂櫻々をぬけて來る
藏王堂花見が派手な忘れもの
吉野山一人で喰べてゐてもよし
吉野山巡査聞ぬけた顏に見え
たけのこで行こうと娘嬉しそう

布施　上田翠光

押花の主を偲んだ椰子の蔭
ほろ酔に瀨戸の把手もうれしけれ

大阪　井上湧三

法隆寺にて

解體と聞く堂塔をまた見上げ
たつた今晝の湯を出た尼に遇ひ

中宮寺にて

大阪　八竹正柳

獨身論搖がさぬ娘の色眼鏡

美術展にて

流儀とは彫みかけかと思ふ像
反省錄三日ばかりは續いたが
ハイキングのなりで敵將降服し
ものの具の一つ白旗あると見え
クリツプス心にもなく跪き
沈むにも三萬噸は華々し
敗軍の將兵を語るに忙しく
彼曰く俘虜となるまで戰はん
馬車馬（ツツチ）の脚にも春の砂埃
蒙古風七階邊へはねを上げ

奉天　吉田水車

續弟を弔ふ

納棺に長軀の姿消ゆるなり
遺品燒く煙は春を告ぐあはれ
想ひ出の消ゆるすべありや遺品燒く
骨壺を抱けば星座が俟つてゐた
骨を拾ふこの現實を蔑しまず

松本　石曾根民郎

花嫁のうなづいてゐるだけでよし
月の出を女佇むことを知り

富士山麓（三句）

湖をかこむ畑は春の人
後になり横になり富士續く
スイツチ・バツクの驛は櫻につゝまれて
十人に足らぬ一列氣が輕し

大阪　正本水客

湯沸しの湯氣を見てゐる暇があり　豐中　黑川紫香

いゝながめ眞下の崖へ砂が落ち
搔き分けて降りれば一つ前の驛
運不運支店勤務のまゝで朽ち　大阪　丸尾潮花

二、三年嫁きませんのと茶を習ひ
人思ふことに馴れたる窓に立ち
未練まだ港の雨に濡れて待ち　大阪　北川春巢

東北の旅

衣料切符持つて半月旅にゐる
飯坂溫泉
丹前へオーバーを着た顏と會ひ
花のとんねる自轉車を押して行く
長いものに卷かれたくない若さなり
南方の夢緣談を寄せ付けず　大阪　尾崎方正

軍人の死場所を得て國多難　大阪　押谷たけを

特別攻擊隊に感激して（三句）

眞珠灣月が出てから又やられ
眞珠灣海の底まで氣をつかひ
敗戰報告特殊潛航艇には觸れず　大阪　西尾栞

愛の結晶もう言ふ事をきかず
四人目を抱いて器用に飯をつぐ
心配しましたで〳〵と義理の仲
氷張る防火用水であつてよし

藝なしが詩吟を習ふことにする
代書屋の愛想刑事の名も訊ね　下關　櫻川不水

花が散る夜櫻なればさびしからず
だまり屋の春酣をうるさがり　英國

不覺さはオールマイティ零になり　伯國

大洋の先でへな〳〵埃立て　廣島　濱田久米雄

女事務强し訓練から戻り
隣組から見舞が屆く不倖

市多樓氏の昇進を祝して

桐の紋二つ櫻が咲いて臭れ
春眠の子へネクタイが結ばれる
米櫃へ春光燦として注ぎ
春の驛遺骨が着いた列となり
轉業の工員服が身につかず　大阪　好崎申仙

夜汽車の瞳富士の麗姿にそゝがれる　大阪　魚住滿潮

金千圓僕が死んだら這入る金
重工業蛙はすみか追れたり
鯉に麩を盗られて龜は亦泳ぎ
虱とる男坐しけり春の寺
百圓を借るに子の判親の判
大の字に寢てこの國のありがたさ　大阪　清水史路

霜害と云ふを身近かに休閑地
けさ活けた花爛漫へ客もなく

殺さぬと言へば堂々白旗立て

バタビヤ城門の皇首

さらし首さすが勇士も目をそむけ
軍神のことでは異見ひとりなく
新世帶なるほど代用品ばかり
あつさりと税金拂ろて飲むと決め

甥第一乙種

乙種でもよろし御楯となれよかし

選擧演說會

洗ひ張りしたとは見えず御高說
どこやらに〝時のへだたり〟ちよつぴりと

大阪　中内翠芳

病歷を聞かれ保險に斷られ
停年で二度目の計畫立てゝゐる
戰捷が傳はる毎に合掌し
釣鐘献納鐘樓でラツパ鳴り

下關　多田市多樓

鐵道屋ですとは自分を知つた氣か
默禱へ風邪をせいてる人も居り

大阪　夷一笑

借家でも買へときれいな手切金
春うらゝ隣の後家は話ずき
成上り謠に趣味をおぼえたり

大津　鈴木石鹿

平熱が續き鏡臺懷しく

亡父三周忌

お供へのないを佛も知り給ふ

大牟田　高田抱逸

嫁、姑、蟹に劣らぬ泡を立て

人形師腕で產めない娘を歎き

下關　國弘半休

口癖か〝眞ん中へお詰め願ひます〟
大掃除父神棚を受持てり
叔父獨り來た面會は物足らず

西宮　阿萬々的

女みなきれいに見える日がさみし
畫にならぬまゝ見とれてたさかさ富士

尼崎　小林文月

告辭祝詞代用品ですんじまひ
知事代理ピヨコンと一つ禮をする
物語式に答辭を述べる娘よ

長女京都女專寄宿舍に入る

入寮に人形忘れぬ長女なり

大阪　小川恒明

轉業の話今夜も遲くなる
こりや斯うですと旦那がへこまされ
引き止めの策こんなにも世辭を云ひ
諦めの悪い奴さと放つとかれ
軍服の姿丙種と思ふまい

堺　津路紅多呂

軍屬になる伜でもほしい愚痴

堺　麻生アート

護られた穹ひつそりと晴れわたり
職能と雖も春はやゝ睡し
逝いてなほ大和の民ぞ二十一
モンゴルを想ふ日風が派手に吹き
訪ねあてた名も黃昏の色の中

武玉川四編研究（三〇）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

（670）

踏てたゝいて此上ハなし

東魚＝全く此の上はない、虐げられやうである。

塵山＝何だか漠然として、捉へ處のない句だ。

省二＝前句がいるわけ。此上はツバでも。

（671）

男に祈付る護摩だん

省二＝乳木を投込み焚いて祈る。句は男を呪ふ意なのであるが、さういふ場合があるものか、私は知らぬ。（本當は、さういふ煩惱の薪を燒くべきが主旨なのである）。

東魚＝男を呪ふ護摩を焚く願の主が、女だけに一層凄じい感じがされる。祈付けるは其心持ちを現はしたのであらう。

塵山＝男を呪咀する護摩などと云ふものは、事實に無からうと思ふが昔の草雙紙には、斯る場面もあるやうである。

（672）

惣身の下卑の出る日當

省二＝日當はヒアタリと讀むにやさすれば、日當の氣持好さに、だらしなくなり、遂には着物も脱ぐといふのを、「下卑の出る」と言つたもの。

東魚＝日向ぼつこの心地よさに、行儀の惡くなるのを「下卑の出る」と云つたので、そこら痒ゆがつたりするのは、下卑たものだから。さうした連想も起る。

塵山＝此の「下卑」と云ふのは、着物や褌の虱狩に相違ない。

（673）

七種を打度夜也天の川

省二＝七種は六日夜と七日朝にやる。「渡らぬ先きに」との言葉を、天の川の御出合に掛けたものか。七種と七夕とを結び付けた丈けか。

東魚＝二星には年に一度の七日であるから、一月にならつて、秋の七種でも打はやし、お迎へしたい夜であるとでも云ふのか。

塵山＝春と秋との相違はあれど、同じ七日であるから、七種を打ちたいと言つた迄である。

（674）

守宮か利て門を留られ

東魚＝惚れ藥が利いて、愈々娘を手に入れやうと云ふ時に、娘の素振りを案じた親達から、出入差止めの門留めを喰つたのであらう。

塵山＝前解に贊成するけれども、斯くては結局守宮の利目が無くなると思ふ。

省二＝門を留められても、遂に手に入れてしまふ葛藤美を描いたもの呵々。クアラ・ルンプールの話が新紙に載つてゐて、五十二歳の老人が町一番の美人と婚約した手段は、惚れ藥をコーヒーに入れて、先づ父親に、次ぎに母親にのませ好きにならせ、最後に娘にのませたと云ふ。此の順でやれば門留めはなかつたらう。事實惚れ藥はあると云ふ事になつて居る。

（675）

かたミの馬の濡通しけり

東魚＝形見に貰つて曳き歸る馬の偶々雨にぬれつくして曳かれる處に一しほ哀れさが思はれる。

塵山＝無官太夫敦盛の乘馬とも解せられる。

省二＝形見の馬が濡れるのでは、材料は揃つて居る。

（676）

女に交る武士の死前

東魚＝「死ぬ前」であらうか。「死に前」として、死んだも同然な奴、死損こない、と罵る意であらうか。女の中に閑日をむさぼる武士として死損こないめ、と云ふのであらうか

川・柳・書・架（83）

川柳漫畫傑作集

谷脇素文編並畫

▼本書の目次概要を左に列擧すると、總力戰風景、前線銃後、春夏秋冬、人生街道、生めよ殖やせよ、人さまざま、職域雜觀、鍊成慰樂、鳥獸戯畫

▼昭和十七年三月二十六日發行、B列6號二三八頁、定價一圓五〇錢、東京市小石川區音羽町三丁目十九番地大日本雄辯會講談社發行。

▼編者谷脇素文氏は漫畫家で、この種の刊行物であまりに有名であるから紹介の要はあるまい。

新刊紹介

永遠の科學者

八野井實著

▼著者八野井實氏は大毎、東日の科學記者である。

▼本書は阪大の若き醫學士が小兒麻痺に罹病し、死の臨牀記錄を遺し、自ら解剖臺に上つて永遠の科學者となつた記錄的科學書である。

左に本書の目次を掲げてその内容の如何なるものであるかを示さう。

一、醫學士成長

○外科教室、學用患者の死、心臟手術、恩師の壯行

分り兼ねる。

塵山＝合戰に籠城したる武士が、多く討死せる後に、一人か二人生殘り、女達に圍繞されて切腹するのであらう。

省二＝私も判り兼ねる。「女に交る」は、女の交ると解し、愈々決戰態勢で、死を堵し出陣する直前の光景を詠むだものかと思つたが。

（677）

横から惚れて錦木を蹴

省二＝思つて居る女に逢ひたい時女の家の前に錦木を建てる。だから横から惚れた者は、其の錦木を蹴倒すより手段はなくなる。競爭心の現れだ。

東魚＝本當に横戀慕と云ふ奴か。

塵山＝斯樣な奴は女にも蹴られる

（678）

戸に狹れて尖を見て居

省二＝痛くもあり、尖が刺つたやうな氣もしてみて居る。

東魚＝一寸した間の寫生句。外は暮れかゝる趣が聯想される。

塵山＝白晝でも薄暮でも、それは孰れでも宜からう。

（679）

剃れと言れて耳なしの山

省二＝大和の耳成村にある小山を耳成山、耳無山などいふ。又梔木が多いので、くちなし山ともいふ。頭を剃つてしまへなどと、異見をされて居る場合であるが、耳が無いかの如く、トント身にしみぬのだ。

東魚＝剃つて詫びでもしろと云はれる場合、頭からすつぽり羽織を被つたりして、恐れ入つてゐる姿が想はれる。

塵山＝剃髮しろといふ意見を、耳に容れぬと云ふので、耳無山は只假に用ひた迄である。

（680）

武士を立れハ目鼻あふなき

東魚＝武士の意地を張れば、危險に直面せねばならぬと云ふのを「目鼻あぶなき」と可笑味に詠みなしたものと思ふ。

塵山＝眞劍勝負と云はれては、三十六計逃るに如かず。

省二＝命あぶなきでは句を成さぬ下七よし。

（681）

夏をつまんで流す麻の葉

東魚＝夏のすが〳〵しさに、麻の葉を流したと云ふのか。但特殊な事があるであらうか。

塵山＝夏越祓に、麻の葉を截つて幣とし、それを禊川に流すので「後拾遺集」に「思ふことみなつきねとて麻の葉をきりにきりても祓へつる哉」といふ歌がある。

省二＝一茶作に『麻の葉に借錢書て流しけり』。人形を麻殼で作つたりもした。『櫻麻の惜まで流す御祓かな』（宗養）。（終）

足掛け四年で、第四編も終る。塵山翁は昭和十七年を迎へるゝに際し、『今年九々八十一と成にけり、いまだ命の御破算もせで』と、風懷をもらし玉ひし如く、實に八十一の御高齢にて、倦むなく古句研究の指導に、御盡瘁下さる事は、感激にたへぬ。東魚さんは北京に移り玉ひ、國家活動の線に添ひ、御多忙裡に數誌へ古句解說を御發表になつて居る、その精力には敬服させられる。私は一昨年夏、はからずも內地へ六十日旅行をなし、東京にて塵山翁に、大阪にて東魚さんに、親しく拜眉の幸を得た。が其後宿痾は段々つのり、昨年は殆んど患ひ續け危篤にも陷つた事があり、今も藥攻めではあるが愈々第五編に着手し得るは、洵に兩氏の御同情の賜と感謝致しつゝある。大東亞戰は多大の教訓を與へてくれる。命あるうちは進行する覺悟である。今後は一層本誌愛讀者諸賢の御支援を希はねばならぬ。（昭和十七年一月末日夜淨書し了る。（笑眉主）

武玉川四篇研究正誤表（二一九號）

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
一三	二	一五	利	利、

二、小兒麻痺
　その前後、死鬪五日、ついに吾れ起たず
三、死の臨牀記錄
　病理解剖教室、研究永遠、脊髓乳劑
四、阪大山邊株
　猿の發病、四代接種、大阪醫學會、山邊精神
五、永遠の科學者

▼卷頭には永遠の科學者故山邊學士の面影並びに阪大山邊株の注射により「小兒麻痺」發病の臺灣猿の寫眞が掲げられ、山邊學士の不滅の功績に讚辭と感謝の辭を惜しまれない大阪帝國大學總長醫學博士楠本長三郎氏、大阪帝國大學教授醫學博士笠原道夫氏、大阪帝國大學教授醫學博士小澤凱夫氏の序文が輝いてゐる。

▼昭和十七年三月十八日發行、B列6號三一〇頁、定價一圓八十錢、東京市下谷區車坂町八九大新社發行。

投稿と郵便料金の改正

四月一日から郵便料金が改正實施されて居りますがうつかりして元の料金で投稿される方もありますので、念のため左に改正料金を抄記いたして置きますから御留意下さい。葉書や往復葉書は從前通りですが、有封書狀は二十グラム迄毎に五錢となり、句稿や文章を寄せられる開封第四種郵便物（通信混入不可）は百グラム迄毎に四錢となりました。つまり投稿に最も多い開封が四錢に、有封の通信が五錢になつた譯です。

川雜投句用箋

前述の如く、郵便料金が改正されましたので川・雜投句用箋も一冊十五錢送料四錢となりましたからお含み下さい。

中堅作家に聽く

出席者
黒川紫香・西尾栞
夷一笑・鈴木石鹿
阿萬万的・浪玲之介

★

司會　奥村丹路
筆記　麻生アート

『川柳雜誌』のどんな點に魅力を持つか

丹路＝皆さんが今日、「川柳雜誌」に據つてゐられるのは、何らかの機緣に由るものと思ひます。が、「川柳雜誌」に載つてゐる句の持つ雰圍氣に惹かれ、自分で一つの目標を拵へて、作句に精進してゐられることと思ひます。この際それを判然と見究めて、自分のものにして了うのも大變有意義だと思ひます。石鹿さん如何ですか……

石鹿＝私の「川柳雜誌」に惹かれてゐますのは、各作家の個性が句を透しまして判然と迫つて來る、とでも云ひますか判るとでも云ひますか、兎に角さうした點であります。禪味の勝つた作家もあれば、非常にインテリーめいた新しい作家も居られるし、亦ずば抜けたユウモリストも居られる。斯やうに多種多樣の作家を抱擁してゐる事が、一番「川柳雜誌」に惹かれる點だと思つてをります。

栞＝同感ですネ……。

丹路＝石鹿さんのお話は、路郎先生が選者として、作者の個性を活かすのを本來の選句目標として居られるためにさう云ふ結果になり、作家としても自分の個性が伸し得られるので、その點に就いては皆さんも御同感だと思ひますが、それ以外に、お氣付きになつた點はありませんか。

栞＝私は路郎先生の選句に、おなさけと云ふものが無く、容赦なくやつて頂けるので……。

一笑＝大體、栞さんに同感です。それから、一つの團體の句會に限らず「川柳雜誌」に載つてゐる全部の句を見ましても、一つとして甘い句を見受けない事が大變嬉しいのです。それに、モ一つ惹かれてゐる點を申しますと、私は川・雜以外の句會に全然出席した事がありませんし、他の柳誌も餘り見る機會を得なかつたのですが――そんな事では井戸の中の蛙と云はれ、世間狹いと云はれるかも知れませんが――兎に角、さうしてゐる裡に外の句會には全然行きたいとも思はぬやうになつて了ひました。それだけ、いま川・雜の句に惹かれてゐる譯で、もうそれで充分だと思つてゐます。

栞＝それに、遊戯的な句が少ない。旦那藝めいた句もない。その人その人の生活の雄叫びと云ふか、詩心と云ふかそれが潑剌と現はれてゐる。常に路郎先生が云つて居られる「いのちある句を創れ」に據つて、おざなりの句が全然見受けられないと云ふ事が何よりも惹つけられる原因です。

丹路＝萬的さんは……？

萬的＝私は最近萬栞集を讀む機會を得まして、何か川・雜の句と相通ずるものがあるやうな氣がして非常に嬉しく思ひました。

紫香＝私が川柳を始めたのは、大鐵局支部の句會が奇緣となつたので、當時支部句會の雰圍氣と云ひますか、あの和やかな空氣に惹かれて、ずつと作句を續けて來たのでありますが、初めて本社句會に出席させて頂き感じました事は、やはり先輩の方々が熱心であり、親切であると云ふ事で、さうした氣持が自然と各作家の作品に顯はれてゐるからでした。これも路郎先生の御指導の現はれであると思ひます。

兎に角、川・雜に關係してゐられる人が、總て一丸となり作句、又は其他の事柄に團結されてゐると云ふ事に惹かれてゐる次第であります。最近感じた事でありますが、下關（支部）の市多樓さんは句會とか或は、尠くとも川柳に關する事になれば、徹夜位ひ平氣でされると云ふ、斯うした熱心な氣分も川・雜の持つ好

い點であらうと思ひます。

石鹿＝川・雜の作家、特に「川柳塔」の作家は他の柳誌にその名を見ません。その點節操が堅いといふこと、一つの信念を持つてゐられると云ふことを痛切に感じ、非常に嬉しく思つてゐます。

玲之介＝私は自分でも承知してゐるほど理窟屋でありますので、大變面倒な事を申しあげると思ひますが、川・雜に一番惹きつけられるものは先生の御人格そのものであります。それは、先生が。句の職人でない、句の日雇人夫でないと云ふこと、並に最も高い知識の持主でゐられると云ふ事が、自分をして命懸けでお慕ひ申上げる唯一つのものだと思ひます。さう云つた意味のものが全誌面に漲つてゐることと、凡ての人の個性が歴然と表出されてゐることです。同時に餘りにも有りの儘の自分が許されてゐる事であります。なほ今後に於て、怎うしても御導き願はねばならぬ事は、尠くとも先生が純粹川柳の始祖として、藝術院會員に席を置かれる日を期待してゐる次第であります。

丹路＝今までのお談では、川・雜への魅力の總ては路郎先生に對する信頼が非常に深いといふ事であり、從つて、より嚴しい鞭を各作家が期待してゐられるといふ事だと思ひます。

句會吟の個性に就いて

萬的＝私は句會の句の個性と云ふものに興味を感じてゐるのですが、雜吟の句よりも句會で作る題詠吟の方に個性の表はれた句があるのではないかと思うのです。それは、雜詠では創る時に制限がないために、作りつばなすといふ加減もあるのか個性が充分出ないやうに思ひますが、席上吟では時間にも束縛を受けてゐるから却つて苦しみぬいて作りあげるので、それで案外個性が出るのではないかと思つてゐます。

丹路＝面白い發見ですが、しかし、さう云ふ場合もあり得る、と云うだけではないでせうた。つまり一概には云へないと思ひます。

石鹿＝それは、然し與へられた題の如何によつて、個性の強く出る場合と、出ない場合があると思ひます。

丹路＝題によつてネ。

石鹿＝それから、も一つ。句會吟に於て、比較的に個性が露はれるやうに思へるのは表現技巧の上に於ける癖が出るので、個性が強いやうに思はれるのです。

丹路＝紫香さんには、いつも句會の面倒を見て頂いてるのですが、その點について特にお氣付きになりませんか。

紫香＝さつきも鳥渡話が出ましたやうに、その題に依つて先づ自分の雰圍氣（境地）を醸し出し、それから表現上あらゆる方向にむかつて進みますが、時間の切迫と共に結局、自分勝手な表現に還る、即ち其作家が生地なりになつて自分の癖を出して了ふ、と云ふ事かと思はれます。

萬的＝ある人の句で時々見受けるのですが、その人の雜吟は斯う云うのも可笑しいやうですが、餘り芳しいのが見受けられないのに、句會吟となると成程と肯かされる名句を吐く人があるのです。

石鹿＝然し句會にもよりけりですなア。

萬的＝勿論それは大きな句會ではなくて、小句會でのことです。

栞＝私は阪大川柳會に席を置いてゐるものですが、阪大の方では割方すら〳〵と……

石鹿＝い〳〵句と云つときなさいよ、（笑）

栞＝……創れるのですが、本社の句會に臨むと、どうもいけないのです。

丹路＝それは小集句會と大句會との氣分的相違から來るので當然だと思ひますが、雜吟を創る時と小集句會でゆつくり作句する時の氣分的相違は左程で無いやうに考へられるので小集句會で創る方が雜吟より個性のある好い句が出るといふのは、おかしいと思ひます。

一笑＝それは、雜吟の方が創り易いと云ふ人と、句會吟の方が創り易いと云ふ人があります。そして、今問題になつてる人の場合は、性格の相違と、それから作句練習の足りてゐる、ゐないに依るのだと思ひます。

丹路＝結局、雜吟の方では時間の制限が無いために苦しんで創る結果、却つて自分のものを失つて了ひ、句會では其反對に、兎に角句にしてしまへと云ふ氣持ちで作り放すために良い意味の個性も、悪い意味のそれも出るのぢや

ないか。

石鹿＝で、萬的さんの云はれる雜吟に於て個性を出してゐない或作家は、その作句態度に何か物足らない、言ひ換へれば熱の無い模倣的な態度があるのぢやないかと思ひます。

投句以前に於ける自選の心構

丹路＝石鹿さんから、どうぞ。

石鹿＝いや、私は迚も自選する所までゆきません。

丹路＝然しネ石鹿さん、自選にも二つあつて、鉛筆を下す前に頭の中で自選して了つて、その句を廢めて了うと云ふ場合と、それから、一度句に捧へ上げて了つて清記する時に、はじめて取捨すると云ふ場合、まあ大雜派に二つに分けられると思ふのです。で相當作句經驗の深い人でも、兎に角一度、句にして、拙くとも捧へて置く、そして愈々投句する前に、はじめて自選する方が纏つた勉強になるんぢやないかと思ふのですが、此の自選の程度も問題になります。亦、自分では價値が無い、拙い、と思つても一つの試作として、先生の御批判の結果を俟つのも、また一つの勉強だと思ひます。玲之介さんはどうです。御自分で嚴しく自選されますか？

玲之介＝全然しません。私は餘り數が多くないのですから……。

丹路＝と云うのは頭の中で整理されてゐるのですネ。

玲之介＝まあ、さうかも知れません。月に一つか二つ位ひは拾つて温めて置いても可いと云ふ題材を探しますネ。この月は船津橋で馬の倒けてゐたの、先月は本願寺の鳩、それと住友さんの二合三勺を考へただけです。

石鹿＝結局、作句態度の問題になりますなア。私は自選と云ふほどの事もないのですが、悪い句ばかり出しては先生に御迷惑をかけますので、自選の心構とでも云ひますかやりかたとでも云ひますか特に雜吟の場合におきまして句の内容から自選する場合と、表現上から自選する場合と結局この二つの段階で自選らしいものをしてゐる譯なんです。それで、先ほど申しました句の内容の自選、即ち作句態度は玲之介さんとは一寸異ふのです。玲之介さんのは川柳的内容と云ひますか、川柳的事件と申しますか、さう云つたものに重點を置かれてゐるやうですが、私は何んなものでも、ぶつつかつて行かうと思つてゐるのです。川柳にならうが、なるまいが、句にしてやらうと頑張つてゐるのです。ですから、内容の點から相當自選を要する譯です。表現の問題、これはもう一般的だと思ひますから、話を省略させて頂きます。

萬的＝僕などは、古い手帖の空白に思ひついた時書き入れる事にしてゐるのですが、いざそれを纏めるとなると餘り好いのが見付からず、御面倒ながら、そのまゝ先生にお屆けするやうな事になるのです。

一笑＝私もノートの端に思ひ出した句を走り書して置くのですが、一旦書いて了うて自選するより、頭の中で自選する方が良いやうに思ひます。何となれば、頭の中で沒にした句は其場合忘れて了つても、後日また。異つた句として生れて來る事があるやうに思ひます。ですから、最近はなるだけ其の方法を執つてゐます。假に、書いて了へば自信の無い句であつても、それは沒にするのが不安で、一應先生にお目にかけたい、見て頂きたい、と云うやうな心持ちのするものです。（二、三同感の聲あり）

石鹿＝私は一旦投句箋に書いたものを、一晩以上は封筒に入れたまゝ机上に置いて、投函前に、も一度自選並に訂正して出すことにいたしてをります。

栞＝私は創つた句の大部分を投句いたしてをります。と云ふのは、やはり私にとつて川柳が生活記錄と云うやうなものになつてゐる關係上、沒にするのが大變惜いのです。それで、一應先生に見て頂いて諦めをつけるのです。

石鹿＝それはありますなア

一笑＝それもあるのですが私の場合は本當の不安であつて、怎うしても自選の出來ない事が、よくあるのです。

丹路＝此處に居られる方々には、こんなことを申上げる必要もありますまいが、川柳を始めだして間のない人が頭の中で、こんな句は川柳にならんと、せんぐり沒にして了つて、結局、句が出來ないと面白くなくなり、遂には辭めて了うと云ふ事があるのを知つて、さう云ふ人には、どんな句でも堅苦しく自選しないで書きとめて置いて、そして兎に角投句して見る方法を奬めたいと思ひます。或る程度の自選は選者に對する禮儀でもありますが、餘り堅苦しくなると遂に行きづまる處れがあると思ふので、ちよつと、蛇足ながら附け加へて置きます。

★お隣組の組座歌舞伎居★

劇柳川

熱

小畑自有浪

時は現代、處は田舎、時候を問はず。

人物

母親　お德（六五）
倅　源助（四〇）
妻　お米（三五）
子　李兵衛（一）
近所の女　お作（四五）
醫者　藤村（六五）

舞臺は上手寄りに、牀几を二つ並べて座敷の心、正面に神棚、下手へ土間、續いて出入口。

開幕と同時に、門口で、お德が泣き叫ぶせがれの兒をもてあまして居る。

お德　ああよし〳〵、泣つきやない〳〵、ええ兒やけん喃、ああかつこい〳〵、かつこぢやで、喃、ちやんと泣き止も、これツ、今日は又、どうでそげいにしつこう泣きさらすだ、馬鹿たれ奴がツ、めめんかよツ、

（と、ます〳〵泣く）

ああさうか〳〵、婆ちやん怒つたで、ああ、惡かつただ〳〵、喃、勘辨してくんろ、さあ、もうええ〳〵、婆ちやんあやまつたんだでちやんと泣き止も、

（ます〳〵泣く）

まあ〳〵このがきやツー。

と此時、家の裏手から、お作が鍬をかつぎ、茶瓶を下げて來る

お作　あれまあ、婆さんや。

お德　おや、お作どん。

お作　李兵衛どん、今日は又どえらくむづかつて居るでねエか。

お德　はい喃、今日は又どうにもこうにも手がつけられねエだよ。

お作　腹へらして居るんでねエか。

お德　なんの〳〵、今し方、田圃へ連れて行つて喃、嫁の乳、うんとこさ呑まして來たとこだに、

（見ます〳〵泣く）

それにこの調子ぢやけに、どうにもこうにもはあ、手のつけ樣が無エだよ。

お作　さう云へば、どうも泣き方が尋常でねエ樣だ喃。

お德　どうも喃。

お作　熱でもあるんぢやなからうか喃。

お德　さあい喃、どうもただのごんたと違う樣だで喃。

お作　どれ、ちよつと見てやるべい。

お德　すまねエだ喃。

お作　なんの〳〵、

（と、兒供の頭をおさえて見て）

はて、

（と、又自分の頭と躾り比べて）

御免よ。

（と、お德の額を躾る）

お德　さあ〳〵。

お作　（又兒供の頭と躾り比べて）ていへんだ。

お德　あれまあ。

お作　熱だに。

お德　熱けい。

お作　熱も熱もていへんな熱だに。

お德　どげんしよ。

お作　なあ婆さんや。

お德　あいや。

お作　おめいさ、又何んぞくわしなさつたんと違うけ。

お德　あほらしい、云うてくれるでねエ、此の間のうどんでこりて居るだ。

お作　何しろまだ半歳にも成らねエ赤ン坊だで、よつぽど衛生ちゆうもんに氣をつけねエだと。

お德　さあそれをぢやて、倅も嫁もぢき云うぢやけど、わしやあそげいなエイセイも何もかも無しに、何んでもかんでもくわして喃。

お作　それがねけねエ。

お德　いいや。

お作　いいや。

お德　いいやい喃、わしやあさうして、倅五人と娘六人を、立派に育てて來たんぢやけに。

お作　でも、昔は昔、今は今ぢやけん。

お德　それがわしにやあ合點がまいらんぢや、何んぢやろうと、今時の若い者んはそげいなことを云うて、くうもんをくわしよらんで。

お作　でも、こうして熱を出したらどうするだ。

お德　ああ、さうだに、此の熱どげんしよ。

お作　引つけ起さにやええだが喃。

お德　そ、そげいなことに成つてくれたらていへんだ、何しろ喃、外孫はうるさい程あるだけど、此奴ばかりはたつた一人の內孫ぢやけに。

お作　さうだに、さあ、家へ這入つて、下ろしてやつて頭でも冷やしてやるべい。

（と、あわてて家に這入つて行つて蒲團を敷く）

お德　はて、こりや困つたことに成つただ喃。

（と、家に這入り兒を下ろして）

どれ〳〵、

（と、兒の頭を躾つて見て）

ほんに、

（と、自分の頭と躾り比べて）

熱も熱もこりや大ごとぢや喃、すまねエだが、は、早う、倅と嫁を呼んで來てくんろやい。

お作　ああよし〳〵。

お德　それから、すまねエだが、ついでにお醫者へ廻つて來てくれねエだかよ。

お作　ああいいとも〳〵、でも、お醫者さ、居なさりやええが喃。

お德　でえ丈夫、近頃神經痛で寢込んで居なさるさうぢやけ。

お作　ああさうけい、それならでえ丈夫だ、わし自轉車持つて行つて積んで來るだ

お徳　是が非でも喃。
お作　ああ、さうともい。
（と、下手へ駈け去る）
お徳　はあて、今朝も今朝とて、白蛇大明神さんのあらたかな御神水がいただかせてあるだに、さうだ、いただかせ様が、足りねエのかも知れねエだな。
（と、神棚に拍手を打つて、御神水の徳利を取つて見るも、一滴も無い）
あれまあ、まんの悪い、ひと雫もねエだ、はて困つただ、でも喃、もうちつとの間がまんして居てくんろうよ、お父うとおつ母あ戻つて來たら、婆ちやんぢき、白蛇さんへ走つて行つて、ありがたあーい御水受けて來て、こんどはたつぷりといただかしてやるだで。
（と、兒供、急に泣き止む）
あれツ、杢兵衛、われ、急に泣き止んで、どうしただこれ、引つけ起したんでねエだかよ、喃、これ、しつかりとしてくんろ、
（と、頬をつ突く兒供泣き出す）
へつ〳〵〳〵、でえ丈夫だどれ、ちつと冷やしてやるべい。（と、土間へ下りて、冢の裏手へ出て行く）
と、此時、下手より、源助と、お米が駈け戻る。
お徳、水を汲んで出て來る。
源助　おお、おつ母あ。
お徳　おお、源助。
お米　そげいに熱を出して居りますだか。
お徳　熱も熱もおめい。
源助　ていへんなことになつてくれただな。
お米　まあ可哀想に、
（と、駈上つて、兒供の頭をおさえて見て）
ほんに。
源助　どれ。
（と、兒の頭に手をやつて）
此の間の、うどんの熱以上でねエか、なあおつ母あ。
お徳　何んぢやい。
源助　おめいさ、又何んぞ。
お徳　馬鹿たれ奴。
お米　まあおつ母あ。
お徳　おめい達は何んぢやろうとわしが。
源助　くわしなさらにやあそれでええだよ。
お徳　ええも悪いも、ぢきそげいにわしをうたがうならわしやもう、明日から、金輪ざい守をしてやらねエだで。
お米　まあ〳〵おつ母あ、そげいに怒りなさらんと。
お徳　怒らいでかい、
（と、土間へ下りて行つて）
而し、こげいに急に來る熱つて云うものはあるもんでねエ、こりや又てつきりなんぞの祟りに違ひねエだ、喃お米。
お米　へい。
お徳　わし大急ぎで拜み屋さんにお伺ひして來るだで。
お米　へい。
お徳　其間、頭でも冷やして充分氣をつけてやるだぞ。
お米　へい。
お徳　きつと又おめい達が、處かまはづに杭でも打つて金神さんの頭にでもけがさして居るに違ひねエだ、ふんとうに若い者んと云うもんは。
（と、つぶやき乍ら、下手へ駈け去る）
源助　やれ〳〵、又拜み屋さんから戻つて來たらてい變だで。
お米　（兒供の頭を冷やし乍ら）
でも、おつ母あとしては、孫可愛さに一生けん命なんぢやけ。
源助　はつ〳〵〳〵、でも御時勢は大東亞だと云うだに。
お米　でもお醫者さ、早う來て下さりやあええだがなあ。
源助　うむ、俺が呼びに行つて來りやあよかつただに、でも、心配だつただし喃。
と、此時、下手から、お作を自轉車に乘せて醫者來る、二人共泥だらけである。
お米　ああ、お醫者さだ。
源助　おお、先生、御苦勞でやす。
お米　お作さも御苦勞でやした。
お作　なんの〳〵。
醫者　はつ〳〵〳〵、
（と、びつこを引き乍ら）
今日ちゆう今日はどえらい目に會はされただぞ。
お作　ほつ〳〵〳〵。
源助　二人共、泥んこになりなすつて、一體どうしなすつただな。
醫者　どうもこうもあるもんけい、このお作どん奴、わし、神經痛でやいとをすえて居る最中だに。
お作　ほつ〳〵〳〵。
醫者　笑ひごとであるけい。
お作　すみやせん。
醫者　無理矢理に自轉車に積みくさつてよ。
お米　すみやせん。
醫者　二へんも泥ん田へ轉ばしやあがるもんだで。
源助　それは〳〵。
醫者　それでとう〳〵、わし足が痛むだにあべこべにお作どん積まされただよ。
お米　それはまことにどうも。
醫者　とこらうで、商賣々々
（と、上つて行つて）
坊主奴、又熱を出しとると喃、
（と、兒供の頭を障つて見て）
ほほう成程、どれ〳〵、又うどん熱と違うか喃、
（と、腹を障つて見て）
おや、やつぱり又うどん熱ぢや。
源助　ええ？それぢややつぱり。
お作　やつぱり喃。

Sata Special Klinik
呼吸器病科
診療 毎午 日前
醫學博士 佐多愛彦 電話 33
醫學博士 加藤謙一
醫學博士 螺良四郎 電尼崎 1151
内科
市電堂島中町停留所北辻西入
佐多醫院
大阪堂島北町 電北八二八四

お米 まあー。
醫者 婆さんどこへ行つただ。
お米 へい。
源助 それがその。
お作 又拜み屋さんと違うけ。
源助 まことにどうも。
醫者 はつ／／／／、ありやわしの商賣敵で喃。
お作 ほつ／／／／、命が大事なら、あんたの藥に氣をつけいとな。
お米 まあ。
醫者 はつ／／／／、さうぢやて、而し、それがほんまかも知れんぢやて。
お作 あれまあ、正直に。
醫者 こりや又何をぬかすだ。
お作 ほつ／／／／、御免よ。
醫者 勝手にせい、とこらうで、婆さん、こんどは又何をくわせよつただか。
源助 ところうがこん度は何もくわしやあせんと申しよりましただ。
醫者 はて。
お作 ほつ／／／／、わしも第一にそれを云うて、婆さんにえらく叱られただ。
お米 うちの人もだに。
醫者 はつ／／／／、おや、
（と、御神水の德利を手に取つて）
此奴、商賣敵奴がッ、
（と、德利の口をかひで見て）
さては婆ばあ奴、これをいかせ居つたな。
お米 へい。
源助 今朝もたしかに。
お米 今日ばかりでねエ、お方毎朝でやすだ。
醫者 はつ／／／／、とうほうもねエ、いつの御神水か知らねエだが、まあ此の匂ひをかひでみい。
源助 （德利を受取つてかひで見て）あゝくせい。
お米 （もかひで見て） まあ。
お作 （も）どれ／／
（とかひで見て）
ほんにまあ、こげいに匂うもんを、いつの水であるか知れねエだよ、それに又、おめいさ等もおめいさ等だ。
お米 ついうつかりと。
源助 ふんとうだ。
醫者 而しまあ、心配することねエ、浣腸さえすりやあぢき熱が下つてしまうだよ。
お米 まあ、さうでやすけい。
源助 やれ／／、それ聞いて安心しましただ。
醫者 而し、わしとしては、とんと儲からん方で喃。
お作 まあー。
醫者 はつ／／／／／／。
と、此時、下手から、お德があわただしげに駆け戻る。
お德 ていへんだ。
醫者 こら婆ばあ、何がていへんだ。
お德 おや、こりやまあ先生孫の熱はどうだ喃。
お米 心配無エだと。
お德 よかつただ喃、ああそれなら喃先生。拜み屋さんが喃。
醫者 そりやあ、わしの喃。
お德 商賣敵ででもあらうが喃。
醫者 はつ／／／／／／、此の野郎。
お德 笑ひごとでねエ、其の拜み屋さんが、腹痛で喃。
醫者 ほおーう。
お德 七轉八倒のお苦しみぢやで、早よう／／、行つてあげて下さるべい。
醫者 はつ／／／／、でもおめい、拜み屋さんのことだで、ありがたあーい、御神水があるでねエか。
お德 さあそれが事によりけり。
醫者 はて？。
お德 おめいさまでも、御自分の神經痛は、どうにもなるめいがツー。
醫者 參つたツー。
一同、爆笑のうちに。（幕）

新發賣
消炎鎮痛濕布藥
粉末エキホス
主治効能 感冒、肺炎、肋膜炎、氣管支炎、扁桃腺炎、中耳炎、ロイマチス、神經痛、打撲痛、捻挫等
今般エキホス姉妹品として發賣したる本劑は專らその藥効並に持續時間の永續に留意して製造せるものにして用法も至極簡便、安全なる粉末濕布藥なり
一、本劑は長時間使用出來るやうに工夫してありますから持續時間は任意にして支差へありません
包裝 一〇〇瓦 二五〇瓦 五〇〇瓦 三瓩
エキホス姉妹品
C-PE19

近作柳樽

選路郎

尖んがつた男歪んだ妻を持ち　和歌山　濱野二重丸
金齒いま鏡へむかし覗き込み　同
渡しまで聞える露天造船所　同
雲ばかり見てゐて春に置き去られ　同
我の強い屋號で古本屋古し　同
赤裸々を荷にして錄音班歸る　同
眞劍な間に手を燒く模型機屋　同
點數を思うてつぎにつぎをあて　和歌山　秋月　宏方
味噌摺りに來たなと課長思へども　同
十二倍しても月給知れた額　同
三十になつてもレベルまだ下げず　同
散髮屋或日自身の髭を剃り　同
看板屋今日は習字の樣に書き　同
捷報にスリツパ高く駈けてくる　和歌山　北垣　神風
英靈の家から廻る回覽板　同
盃を發矢と碎き俺は征く　同
別れた日あの日鷗も啼いてゐた　同
戰友退院原隊復歸す　內還
今度逢ふ時は敵都と微笑んで　同

皇后陛下御下賜鶏卵購部に拜す
拜み、食べ、食べて、拜んだ御下賜品　同
友へ
金借りにきたのにコンパクトを使ひ　大阪　橋本美奈子
眞直ぐに見つめる視線戀でなし　同
志津惠卒業させて（二句）
卒業を先づ佛前へ坐らせる　同
スクールライフが戀しいか窓により　同
早いわよ等と卒業取合ず　同
春雨の傘に相手が欲しくなり　香川縣　早馬　清富
生きて居たのか昭南島で手を握り　同
轢死體衣料切符を持つて居り　同
グライダー櫻の花を又散らし　同
行列も知らず晴耕雨讀なり　同
停年も間近か情味の裁きよう　長野　堀內　敏郎
生ひ立を述べる被告へ貰ひ泣き　同
裁く人の身にも寒かろ朝の雪　同
ウインドーフランス人形ころんでる　同
看病の母の白髮をそつと見る　同
征く朝の決意は口の一文字　京都　宮川　春涉

柳川 類題索引

▼本稿は「川柳雜誌」の課題句を蒐錄したもので、第一號から第五十九號までは安井ひろし、越村加香、故安井欣女の三氏の手によつて採錄され第六十號から第百七十九號までは竹內機見女氏を煩はし、第百八十號から第貳百拾五號までは松浦帆船氏の勞になるものである。第五十九號までは既に本誌に發表濟みではあるが本稿は便宜上それ等の全部を合せて發表することとした。

▼安井ひろし氏等が、最初の發表にことわつてゐたやうに題の分類上、最適でないと思はれるものもないではないが、すべて前者の分類によつて異にしなければならない。例へば「鯛」は魚の部であると同時に食膳にのぼる「鯛」は「飲食物」の部に屬すると云つた風でなか〳〵煩雜なので、分類上多少杜撰な點を發見されるとも、その點諒とされたい。

▼題の配列はすべてABC順にした題の下の日本數字は「川柳雜誌」の號數で、算用數字は其の號にある題の發表ページ數で、例へば、汗五四（53）とあるは第五十四號（第五卷七月號）第五十三ページに汗の句があることを示したのである。

▼課題を左の如く大別して索引に便することとした。

（一）人情、風俗、人事、身體

病氣

虹を見る兵に十九の妻ありて　同
米英を論じて香具師は何賣る氣　同
憲兵に母子の情をどなられる　同
平凡な名で大臣となりにけり　同
恩給が付いてこれから金が要り　姫路　小川靜觀堂
問題はみんな召集が解決し　同
マニラ灣よく釣れますと軍事便　同

老母逝く

初七日の乾しのこされた藁蒲團　同
父征きて子の成績の素晴らしさ　大阪　山本葉光
燈管を行きとどかせて夜業する　同
殘置燈の蚊柱夜廻り見て通り　同
水槽に佳き日の朝の旗映る　同
轉業の今日から刻煙草喫む　岡山　岡田笛六
よつぽどの無口と床屋思ふなり　同
眼鏡越し癪だが代書頼むなり　同
第一に聲そのものが氣に入らず　同
軍事便隣へ行つて封を切る　大牟田　松島波人
往く雲を故郷の空として眺め　同
歸化人はのどか母國の亡びるに　同
希望まだ捨てず老舗を賣るつもり　大阪　桝岡詩朗
墓口の中覗きこむ殘置燈　同
電髮の話になると娘はにげて　同
モンペイを履いて「ガニ又」知られだり　大阪　米田春童
御休息所ハンドバックから出る煙草　同
發車ベル新妻チョコ〳〵あわてたり　同
一列はひげの旦那で賣切れる　金澤　入口障子
さあ春だ鍬も納屋から出しとこう　同
何事が世に起れども花は咲く　同
お彼岸を誰にきいたかつばくらめ　大阪　中野延枝
反抗をしたい氣持がつとめに出　同
高望みせんことねえとコーヒまぜ　同
突擊へ十六ミリも武裝する　豐中　高山武士
再起する決意握手に有る力　同
演出へ餘りに違ふ原作者　同
產聲へ障子は朝の色となり　大牟田　池田有明
珍客の膳も空地の味で出來　同
理髮師のたばこマスクは顎にあり　同

散宗章子四十九日法要

死顏の寫眞寢てゐるとほりなり　布施　原田輝親
奠賽の一票持たず假住居　同
手提から衣料切符が覗いてる　同
海拔の大氣に薄給など忘れ　東京　山田宙望
花の香を求めて行けば馬の尻　同
重役に成れそうもなく市電乘る　同
草花をさす月曜の社の机　名古屋　八幡勿來
氣の長い人に佇たれる金魚釣り　同
連捷のニュース內職坐りかへ　同

亡子博を想ふ（三句）

無理ひとつ言つ奥れずに子は逝ぬ　大阪　恩賀紀川
秘と書いた一束棺に入れてやり　同
逝つた子の校庭よぎり曇低く　同
母小さくカメラの前にかしこまり　神戸　平川久枝
夕方の市場に來れば世帶じみ　同
點數になつてサービスかはる店　同
どこをどう潜つて飲むか醉つて居る　大阪　今井松花
休閑地大きな錠がかゝつてる　同
高架線遠い櫻の花も見る　同
夜が明けて見ると綺麗な占領地　神戸　酒井新吉
すられたを切符にすれば五六百　同
咳入れば アパートの壁近すぎる　同
義理で嫁く婚禮葬式にも似たり　大阪　佐野牛步

（一）職業、職名
（三）家庭及家族
（四）衣類、裝身具
（五）飲食物
（六）建物、家具、器物、事務用品
（七）天象、時令、自然
（八）地理、地名
（九）宗教、社寺、祭事
（一〇）鳥獸、虫、魚、草、木
（一一）娯樂、演藝、映畫、音樂、運動
（一二）通信、交通
（一三）雜

A

（一）人情、風俗、人事、身體、病氣

逢戻り　一八（21）
あてすつぽう　四一（45）
安心　四三（56）四四（54）五五（53）二〇二（23）
欠伸　四五（57）五二（51）六九（43）一八九（17）一九五（18）一九六（17）二一〇（31）
相手　四五（58）二一一（31）
案內　四五（59）四九（50）
足跡　四七（49）二一二（31）二一五（30）
胡座　四八（62）一九〇（15）
相性　五〇（57）五〇（59）一九〇（15）
垢　五一（54）六二（30）一九三（18）二〇六（32）
足音　五二（56）
愛の巢　五四（53）五五（54）一八〇（19）一八七（15）一八八（18）一九二（24）
汗　汗と兵隊　一八五（1）

嫁く先と 嫁く日尋ねて 五百點　同
五百點 いらぬ滿洲へ 嫁きました　同
性善は 社長の性も 少し受け　大阪　新川 博也
太平洋 かくも少さき 海なりき　同
青空に とけて日の丸良い姿　同
妻若し ライスカレーを 作り待つ　兵庫縣　谷口 寒草
女事務 なか〳〵やめる 氣色なし　同
電話賣る 話さびしき こゝろもち　同
あの中で肥えて居るのはうちの子よ　大阪　富岡 巨人
水槽に 錦魚が 遊ぶ勝いくさ　同
上阪のみやげ 地卵と 内地米　同
ホロンバイル人も羊も 春の色　滿洲　喜多猪三郎
雪解けて 馬車も輕い音で來る　同
慰問袋 先づ故郷からの 嗅ひかぎ　同
十八九ならば と思ふ事 多し　廣島　大山 露斗
みそしるも 非常時と云ふ 朝々や　同
うつむいて働く友の 一人なり　同
どうしてもひとり着も子のシヤツが裏　大阪　金井 串郎
三女四女おもちやをくれる人もなし　同
變化少き 女の顔をじつと見る　大阪　木下 誠治
救急車 櫻吹雪の 中を飛び　同
節米へ摘草の 價値見直され　島根縣　田中 秀香
丙種殿軍服も 買ひ靴も買ひ　同
一坪へ モンペきりゝと 肥をやり　大阪　有馬 千斗
シナリオを 書く暇があり 若旦那　同
春風よ吹け 〳〵 長男誕生だ　大阪　新谷 柳風
純綿の 浴衣やゝこに皆とられ　同

山本勇坊君へ

あれ以來便り 申さず櫻咲き　島根縣　田中 弘樓
北鮮へ櫻の候と 書く遠慮　同
白樂天合成酒では詩にならず　大阪　内田 掬夫

天皇旗白馬の前に肅として　同
獸醫まで 呼んで淋しい 子なき家　大阪　吉川 琴聲
起重機はよつく世相を知つてゐる　同
湯の町の 風動かして ハイカ行き　尼崎　長谷川三司
運命と諦めかねる灯をともし　同
御破算へ臨時ニュースが響くなり　松江　入澤 笑鬼
常會で組長さんが吃るなり　同
オツサンと言はれて隊の人氣なり　島根縣横田町　横川 美柳
明日を待つ壕へ殘つた月一ツ　同
軍服へうれしく三十二點減る　島根縣横田町　新出谷一聲
子よなづけ父の歸還の膝に寢て　同
メコン河國防色で塗りつぶし　佛印　清水 角坊
トーチカの窓より拜む初日の出　同
切符制猫の額も葱青む　大阪　松岡 照二
二等車も野菜のごみがある終點　同
薙刀も弓も引きます時局の娘　名古屋　松井 靜子
友の愛兒の死を悼みて
兒を持つた倖せ故に知る涙　同
僧が來て故人の話更まり　釜山　三木一二朗
默つて出てゆく醫者に今日の風　同
面積に變りはないが世界地圖　青島　葛蒲 榮城
「イエス」「イエス」とシ港明渡し　同
官吏とはかくも常識なきものか　愛媛縣大洲町　米澤 曉明
軍神へすまない悔の多き事　同
御守をけなし切れない年齡になり　熊本　藤本 水源
落つかぬ氣持火鉢の向きをかえ　同
春日遲々、徒食をかこつ身に長き　山口縣小郡町　長野 井蛙
百點を着てマネキンも春の柄　同
おしめ干す舛へ春の水光る　大阪　野元 吐空
椽側へ机持ち出し春の風　同
產め〳〵と鷄を機械にする心算　岡山　佐伯 鷄城
轉勤へニックネームが增えただけ　同

諦め 五四（5 5）
媾曳 五四（5 6）
安着 五五（5 2）
あせる 五七（5 0）
愛人 一七五（1 6）
愛嬌 一八二（1 7）二〇九（3 4）
仇討 一八一（1 9）
阿呆 一八二（1 5）
後廻し 一八五（1 5）
雨宿り 一八七（1 6）
雨乞 一八九（1 6）
惡友 一九〇（2 4）一九三（1 9）
愛情 一九一（1 7）
惡筆 一九五（1 9）
空巢 一九七（2 2）
あまへる 二〇二（2 3）
足許 二〇三（1 8）二〇八（3 4）
甘黨 二〇五（3 1）
慌てる 二〇六（3 4）
あの頃 二〇六（3 4）
挨拶 二〇七（3 1）

B

紅 五（1 3）
別離 五（1 6）
病身 一一（1 5）
坊主持 二二（2 1）
尾行 二三（2 3）
美少年 二四（3 0）
馬鹿 二九（3 1）一八三（1 5）
病弱 三〇（7）
醜男 三一（2 0）
美人 四三（5 6）五四（5 0）
貧乏 四四（5 8）五三（4 6）
五三（5 6）一八五（1 4）
凡人 四五（5 8）
忘年會 四九（5 5）
不精者 五〇（5 6）
晩婚 五五（5 7）二〇六（3 4）

母の白髪をぬきつゝ
これ白髪母の頭だもう生えな　大阪　谷崎　一昌
父母の外まだ大切な人がある　同　久保田可學
更生車ドクトル小さく腰を掛け　廣島　同
未亡人虚勢を張つた男下駄　朝鮮　松田　幸士
默禱す妓生のショール雪に垂れ　同
ある校長へ一句
吾が子なし兒等に割木を運ばせる　奈良縣王寺町　森田カズヱ
物乞へ或日輕蔑だけ感じ　同
點數で結構やれる腕を持ち　大牟田　濱本　邦夫
（召集の日）
未練ではない手へ高く子は抱かれ　大阪　齋藤　三丸
模型機と走れ〳〵の春の空　同
食べさせて着せて組長不足聽き　朝鮮　加川　泉泡
兵隊が一人殖えたぞ鯉幟　北支　宇敷　桃水
回顧北支房山陣地
不發彈ナツメと共に落ちて來る　同　山本耕一路
カメブロに攻擊前ののどを聞く　神戸　市川　治男
日本に生れ征く日の日本刀　同　山本耕一路
（三山トハ赤城、榛名、妙義ノ三山）
三山も笑ひ軍神迎へたり　同　丸島　利生
バスガール無賃乘車にさようなら　同　上山　笑風
子守する屋上までの百貨店　同　湯淺小城子
巖の貌蛟龍・魍魎・夜叉・羅刹　堺　德岡　映二
霞、霞春は硝子の中のやう　大阪　森川　九一
嫁がせて親の苦勞が身にこたえ　島根縣　西村　小菊
去年の中學入試回顧
入學の嵐は今年何處を吹く　愛媛縣菊間町　岡田　香桐
陸軍記念日
亡き祖父の從軍記章功七級
子をみんな捧げて家を廣く掃き
顯官のような名刺をそつと出し
ほゝほゝと妖婦と少女笑ひ合ふ
あれだけの體衒頭寫眞商
のどかさは山に抱かれた村に住み
聖戰は此海纒き網を干し
寢ころべば新芽の匂するのなり　大阪　橋口　松嵐
往き絶えた女の住所だ消しておこ　大阪　浪花駒志希
讀めないがさて賣ろと言ふ本もなし　東京　岡部　士節
ささやかな暮しへ亡父の額をあげ　大阪　中西　彌生
勝闘の向ふで俘虜も手を擧げる　大阪　水谷　虻蜂
大陸を九州辯で押通し　滿洲　塚崎政一郎
噫九勇士日本刀をヂツト見る　安東　山崎　勇祐
お隣をボヤで止めたモンペ隊　大牟田　富田　一葉
配給所お客の方が叱られる　大阪　山田青々子
お剌身は一切づゝの子澤山　大阪　水谷　竹莊
米英の軍歌蔣よお前は強かつた　長野縣上山田　佐二木千隈
榮の花の咲いたを南支春と決め　南支　志野富美夫
氣の强い、叱つて規則敎へられ　津山　二宗　吟平
花柳界話せば昔の夢ばかし　滿洲　西垣　錦風
思想戰煙も音も起たねども　諏訪　牛山　臥牛
献納の銅貨昔の匂する　松江　岡崎　祥月
興亞の兒親爺の點まで履き破り　滿洲　安田梧一路
お嬢樣などと言はせぬ時局なり　松江　宮森　品枝
鍬振れば戰地の友が眼に浮かぶ　松江　大和　太郎
春の陽に疲れし驛の人の渦　大阪　藤森小雅子
失戀もしましたパーマで十八九　兵庫縣　小林かづさ
踏切で待たされながら數をよみ　兵庫縣　細田　愚人
踏切で待てば我が家に燈が點きぬ　兵庫縣　前田　勇風
靴下のおとぎ話で夜となり　兵庫縣　勝　草水
踏切に蛙一匹轢れてる　大阪　毛利　稔幸
踏切番人生觀を持つて居る　大阪　田川　迷
敵艦は擊沈されて名を知られ　大阪　東方　鷹丸
感涙の應ふは皇軍より生れ　札幌　杉山怒來步
九勇士の遺書に一億泣かされる　松本　西藤　義春
晩酌で治つた風邪がつきまとふ　大阪　宮田　不二
不孝者やはり東京に巢を構へ　尼崎　山森　蜂郎
子を負うた女の足の骨はつて　丸集　平澤ゆづ蘭

ボーナス　五六（46）
一八〇（18）一八一（19）
一八六（20）
母性愛　五七（49）
美男子　五九（45）
罰　八六（41）一八〇（21）
微笑　九六（63）
募集　一八〇（18）
ポンヤリ　一九七（21）
萬歳　二〇五（33）
辯解　二〇八（31）
ベンチヤラ　一八七（17）
一九八（21）

C

忠義　二（9）二〇四（29）
二〇四（34）
忠　二〇四（37）
町内　二八（27）四三（52）
五一（46）二一〇（31）
町會　二〇二（22）
貯金　三五（10）
近眼　三五（19）三九（43）
五三（50）
注射　三七（36）一九一（17）
一九四（19）二〇四（35）
力　四八（67）一八二（19）
一八七（16）一九一（17）
智慧　四九（67）
千鳥足　四九（56）
忠臣　五二（48）五二（52）
調査　五三（54）
中年增　五六（46）
忠告　五七（54）
忠僕　五八（43）
陳情　一八八（13）
遲刻　一八〇（18）
中止　二〇三（19）
挑戰　二〇五（31）
沈默　二〇五（31）

初等川柳講座（四）

川柳の音數と其のくぎり方

麻生路郎

はじめて川柳を作らうとする人たちは、先づ形式に眼を向けるやうであります。

そして川柳といふものは五音七音五音と指を折つてでも兎に角十七音字を並べさへすればいゝのだと思つてゐられるやうであります。その道の先輩の指導をうけましても、思つたことを何んでもいゝから十七字に纏めて御覽と云はれるし、世間に流布されてゐる入門書を覗いて見ましても矢張り同じやうなことが書いてあるので、初心者が、すぐ形式から手を染めやうとされるのもあながち無理からぬことだとは思ひますが形式といふものは一般に考へられてゐるやうに一定不變のものではありません。一寸見ると、どの句も、どの句も同じ形式によつて詠出されてゐるやうに思はれますが、仔細に分析して見ると、その形式が内容につれて異なつた形をとつてゐることに氣づかれるでせう。從つてタツタ一つの形式だけのみ込み、川柳の形式といふものはこんなものだと早合點をして、どんな内容のものでも、その形式にあて嵌めて作句いたしましたならば、その句は、いたつて無味乾燥な、箱庭式な句になつてしまうでせう。これは形式が内容の價値を左右し得ることの證左でもあります。

私が、川柳を定義づけました時に「川柳は十七音字中心の人間陶冶の詩である」と述べまして特に十七音字中心の文字を挿入いたしましたのは川柳の形式のある自由さを示したのに外ならぬのであります。川柳の形式は五音七音五音の十七音字であると定義づけたといたしますれば、形式上、動きのとれぬものとなつてしまうと考へたからであります。

ところが、十七音字中心といふことになりますと、川柳の形式はかなり自由なものとなります。斯う申上げると、では形式はどうでもいゝのかと必ず反問されるでせうが、文章の切れつぱしのやうに出鱈目な長さであつていゝといふのではありません。三十音字あつても四十音字あつてもいゝのだといふのではありません。十七音字中心といふのはここのことです。徒らにダラダラと長い形式であつたりポツンと五音字か七音字位を吐いてこれが川柳だと云つたところで、それは川柳として認める譯には行かないのであります。

「――――元日暮る」や「鋏でチョンギツタ」といふやうなものを川柳として發表して後進をまどはした作家もありましたが、これを川柳とすることは第一形式が容さないのであります。たとへ斯うした最小限の形式が容されたといたしましても、その内容の淺薄さはどうすることも出來ないのであります。右に擧げた短い形式の句?に哲味があるのどうのと考へることは作者の自己陶醉であつて、第三者に何等の感銘を與へないことはいふまでもありますまい。つまり、斯うした小さな形式には、作者が考へてゐる内容のすべてが盛り切れないのであります。その點十七音字中心の詩型は、日本人の詩心を盛るに尤もふさはしい最小限度のものだと云ふことが出來ます。

又、自分の考へてゐる内容が僅に十七音字では盛り切れないと云つて、ダラダラと三十音字にも四十音字にも引きのばすことは、多くの場合作家の技巧の拙いことが起因してゐるやうであります。でなければ、はじめから、川柳として扱ふことの出來ない内容を盛らうとしてゐることに氣づかないのであります。

では、從來どの位の音數で作句されてゐるかと申しますれば短い句で十二音字、長い句で二十二三音字に及んで居ります。尤も短い方の十二音字は極く特定の作家が用ひたのに過ぎません。七・七の句でさへ十四字詩として別扱ひにされてゐる位です。十五音字、十六音字は時に發見されますが、推敲不足の句が多いやうです。長い方の句では十九音字が一番多く、その次が十八音字で二十音字以上は極く稀れであります。調子の上から申しましても十七音字が尤も優れてゐることを思ひますと、川柳の本來の姿は十七音字だと云ふことが出來ます初心者はそのつもりでなるべく十七音字の埒外に出ぬやうに作句することであります。

要するに、川柳の形式は一行詩でありまして、諸外國にも類例のない短い詩型であります。しかし、これを音讀いたしますと、その形式が決して單純な一行詩でないことに驚かされるのであります。

次ぎに音讀によつて分解される型の種類を擧げて見ませう。

俺に似よ　俺に似るなと
子を思ひ

（路郎）

は「俺に似よ」が五音、「俺に似るなと」が七音、「子を思ひ」が五音で標準形式の五・七・五型の句であります。

滿員車　妻はあすこに　子はここに
（勇記）

火の姿　鬣と搖れ　尾と搖れる
（耕一路）

隣組　二人三脚　四捨五入
（市多樓）

立候補　あの演說は　俺か書き
（喜由）

など、何れも、この五・七・五型であります。

この外、七・五・五型や八・九型、九・八型、六・七・五型、五・八・五型、七・七・五型、五・七・七型等々幾らでもあります。

なほ異例としては七・七型があります。これは「武玉川」を繙けば、その大多數が七・七型だといふことが出來ます私たちはこれを短句又は十四字詩と呼んで居ります。前述の五音も更に二音と三音、三音と二音、二音二音一音、一音二音二音、二音一音二音といふやうに分解することが出來ます。七音も、三音四音、四音三音、二音二音三音、三音二音二音、三音一音三音、三音一音二音一音、一音三音一音二音と云ふやうに幾らでも分解することが出來ます。

これは句の內容を尤も適切に表現するため、音の硬軟を選む上に必要となるものであります。

しかし、川柳は五・七・五式に切れてゐるものであるといふ大ざつぱな考へ方をして句を披講いたしますと、句によつては著しく句の印象を弱める場合があり、句會などではそれがために沒の憂き目を見ることが稀れではないのであります。

斯ういふ理由から私は從來の句の切り方を排して、句意によつて切る方法を採つて居ります。

例へば

闇取引　若き檢事は火の如し
（滿潮）

の句について申しますれば、從來の切り方では「闇取引」「若き檢事は」「火の如し」と三段にくぎつて音讀し所謂五・七・五型の句だといふことになります。が、私はこの句を三段に切らず、句意によつて二段に切り五・十二型の句といたして居ります。この句などは三段に切つても、句意が不明瞭になるおそれはありませぬが、二段に切つて讀む方が迫つて來るものを感じますので、私は五・十二型の句とする方が劃切だと思ふのであります。從來五・七・五型であると思つてゐる句も斯うして句意によつてくぎりますと、純然たる五・七・五型の句はいたつて尠くたまくありましても佳句として推奬するに足る句は寥々たるものです。

家ダニへ　お隣組の勢揃ひ
（自由題）

も、「闇取引」の句と同樣のことが云へます。

腰掛は　瀨戸か伊萬里か　藤の下
（馘乃）

の句は從來の切り方では五・三・四・五と讀み下すことになりますが、句意で切れば「腰掛は」「瀨戸か伊萬里か」「藤の下」と五・七・五型に讀む方が適切だといふのであります。

カナリヤに留守番さして　どこへいた
（豆秋）

割切れぬ世の中じやもの　妻寢する
（貴志子）

朝露の嚴しさに堪ゆ　蓙のごと
（アート）

厘毛を爭ふ瞳　恐ろしや
（滿潮）

は何れも句意によれば十二・五型である。

めつそうな顏で　千圓斷られ
（不水）

これは句意によると八・九型である。この句を「めつそうな」「顏で千圓」「斷られ」と五・七・五調で披講されたとしたら、句意がボケて入選するかどうか疑問である。私が句はすべて句意によつて齣切つて讀む形式を採らねばならぬと云ふ理由が、うなづけるでせう。

科學萬能　しかし　機械は狂つてた
（孤逢）

は句意によると七・三・八型である。

俺は醫者だ　そうして　母の子でもあり
（生々庵）

は句意によると六・四・八型である。

踊り喰ひ　ふと　地獄繪を思ひ出す
（孤逢）

これは句意で五・二・十型である。

ちよぼちよぼちよぼ　ちよぼちよぼと咲く　女郎花
（馘乃）

は「ちよぼちよぼちよぼ」で切り、「ちよぼちよぼと咲く」で切り「女郎花」で切つて、六・七・五型である。從來の切り方と、句意による切り方とが時に一致する場合もありますが、大ていの場合句意によつて句切る方が、句の價値を充分に發揮します。

斯うした研究を讀者自身が自作の句によつて試みられたならば表現上のささいな疵でも摘出することが出來句の推敲上大いに役立ちます。

ルービヒサア
大日本麦酒株式會社

川柳世界史

(XIII)

戸田孤蓬

(一六) 東西交通

公路

亞細亞からヨーロッパの眞中まで蒙古人のベタ足が强引に踏みかためたあとから犬猫豚人間がゆきをはじめる。

踏みかためてみれば天山南北路

マルコ・ポーロ

マーキュリーと云ふのはどんな神さまか知らんが、金儲けのためなら千里を遠しとしなかつたポーロ一族もこの申し子にちがひなかつた。戰爭をさけて足を東に向けたのがはじまりといふことだが、はるばる長靴のイタリー半島から北京まで何べんも往復し、忽比烈からヨーロッパ文化の輸入を委囑されたりしてゐる。マルコ・ポーロが滯蒙二十三年にしてヴェニスに歸つた時は全く浦島さんそつくりだつたとか。後ヴェニスの艦隊司令長官に祭り上げられるが御得意の金儲けや冒險でなかつたと見えて捕虜になり、その幽囚の獄中でものしたのが東方見聞錄。黃金のジパング(日本)を紹介して慾の深い手合を刺戟する。

流れ矢をさけて東へゆくときめ
忽比烈テスト・オーダー出してみる
マルコ・ポーロそろそろ黑い瞳にあきる
話より寶石の方信じられ
支那の日の思ひ出獄窓陽があたり

その他の交通者

マルコ・ポーロの前後に宣教師で東西交通をした人々がある。いづれもローマ法王と蒙古皇帝の文遣ひをしただけ。蒙古の再來襲をおそれる法王の一つのヂェスチヤアであつたが、ものを賴むにしてはあまり橫平すぎたので蒙古の方もつゝけんどんに追ひ返してゐる。しかし再遠征をする程の氣力も蒙古人にはなく。ヨーロッパ人は隣人支那を認識する。

東洋はものをたのむに禮があり
お上手を大汗輕くうけ流し
モンゴルの惡夢が消えただけのこと
なぐられてからお隣の顏をみる

(一七) 歐洲暗黑時代(下)

擡頭する市民

一口に百年といふが十字軍は前後百七十年百年戰爭と云ふ英佛の紛爭は正味百十四年。スピード萬能のアーリアン種族としては隨分氣の永い時代であつた。十字軍は全くの龍頭蛇尾に終つた。發頭人の法王は當然とはいひながらインチキ呼ばはりをされる。猶太人は金儲けのために戰爭を製造するそうだが、十字軍はヴェニス、ゼノアあたりへうんとこさお金を落してゐつてくれる。町人の時代きたる。今は昔ロンドンの金融中心地にロンバート街といふのがあるが、そのロンバートは北イタリーのロンバルジヤからとつた名であるとか。

六才にしてすでに利息の勘算
貸方借方シヤイロツクを見上げ
十字軍歸還地球は廣いなと思ひ
君命が何だとヴエニスの小商人
騎士道を立てるお金を借りにくる

ハンザ同盟

アルプスの險を見ざる黃金の魅力はラインの流に沿つて北上、北海のほとりにハンブルグ、ブレーメン等の諸都市を建設。ルフト・ハンザ航空路に今日もその名を殘すハンザ同盟となる。

絹の店今日の大市も賣り切れる
胡椒船マスト折られて入つて來
ハンザ同盟今日も强訴に勝つてくる

ギルト

それからヨーロッパに組合の元祖ギルトが出來る。華かな商業時代の訪れ。

親方の娘すがめのまゝで嫁き

東ローマ帝國の滅亡

蒙古の占領してゐた裏海あたりに土耳古族の一派オスマン・トルコが起り、半身不隨名ばかりに痩せ細つてゐた東ローマ帝國は滅される。ローマ正教に對抗してギリシヤ正教の嫡流を誇つてゐた皇帝の名はその血の一部とゝもにロシアにうけつがれる。

搦手の砲火ドームを亦ねらひ

スイスの獨立

我子の頭上におかれた林檎を一矢で射拔いたウイルヘルム・テルと惡代官ゲスレルの

故事。スイスは神聖ローマ皇帝の傘下より脱して獨立の烽火をあげる。弓矢から鐵砲への過渡期。農民にだつて武器を持たせばこんなものだと氣勢を示す。

ゲスレルは討たれる弓をほめそやし
ゲスレルの悲劇私は召使

傭兵

イタリーはカロル大帝の長子ロテイールが統治してゐたが、統一とは名のみ群雄割據が繰返され、古代文化の末裔等は日毎夜毎傭兵と云ふ戰爭業者に先棒をかつがせて、

傭兵賃見ずにうつかり死ねません
ロケーションみたいに終る大いくさ
よくよくの運のない奴討死し

大憲章（マグナカルタ）

海の向ふのイギリスでは血の滴る牛肉をくわへたロビン・フツドが森の中からやあやあと通りすがりの大名行列をおそひかゝり、空巢をねらつて兄貴の位をかすめとつたジョン王の隊や如何にとスパイからの報告を待ちうけてゐる。そのジョン王は鼻柱が強すぎて結局法王に領土權をとられ、上下の威信をすつかり失ひ、世界最初の憲法であるマグナカルタを臣下から無理に押しつけられる。

鬼門からロビン・フツドが現れる
すね損の尻を旦那がぬぐひ兼ね
爪印は寒いテントの中である

ジヤンヌ・ダルク

今度はフランス。やゝつこしい王位爭ひ。先代の親類がイギリスから文句をいひに來て喧嘩をおつぱじめたのが百年戰爭。英勝佛負ときまりかけた時忽然と降つて湧いた樣に現れたのがジヤンヌ・ダルク。孤忠は完成したと云ふものゝ火刑の末路は哀れ。

だいがはり親類けちをつけにくる
神の聲消えると牛の臭ひする
白衣白馬この膽魂を醼（めさ）ませる
火刑の時刻佛王たゞ拜み

薔薇戰爭

このどさくさの終らうとする時代に前九年の役の義家貞任の歌問答を思はせる胸に紅白のバラをつけて戰ふ薔薇戰爭が百年戰爭の搖り返しの樣に三十年間イギリス人同志の間で戰はれ貴族の家系が著しく減少し、世は中央集權の時代へ拍車をかける。

薔薇の咲くとこへ兵站支所をおき
彌次馬の歸つてみればうちも燒け

菜園難

長野文庫

隣組の常會で「一つ野菜位は自分等の手で作らうぢあないか」と云ふ事に相談が一決し小生等數人が畠地の借入係と云ふ事になつたので、その翌日から仕事を放り出して置いて畠地探しに出かけたが、平生一歩外へ出ると何處もかしこも空地だらけの樣に思つて居たのにさてそれを借り樣とすると「こちらが作らうと思つて居る土地です」とか「建築豫定地です」とか「賣地だが貸しはしません」とか、何とか障害があつて一坪の土地も借れない、そこで心易い人々に貸地の世話をたのんで置いた所、數日後に「貸地があるが借りないか」と云つて來たので行つて見ると、大きな工場の北側で半日しか陽の當らない所で迚も野菜は出來相もない、野菜は出來まいが句にはなつた、

貸すと云ふ土地は終日陽が照らず

その翌日他の一人から貸地がある而も三段以上有る土地との報告に接したので尋ねて行つて見ると如何にも廣々としてよく肥えた畠らしいが、何しろ市中から三粁は充分に有るところで一寸隣組の菜園には不適當、これも落第だ、

小一里も離れたとこに貸地あり

その後未だ適當な土地が見つからぬ、古人が「詩を作るより田を作れ」と云つたが現在は田を作るより詩を作る方が容易だ。

2(1)347

隨想

丹波の狐（三）

★★★ 小山文三 ★★★

○

關西殊に近畿地方一般には狐施行と言ふ行事がある。

冬の夜、小田原提灯を點けて、三三五五隊を組んで、オセンギヨ、センギヨと高らかに唱へつゝ、稲荷大明神に參詣し、道すがら赤飯と油揚げを土手際に捨てゝ行くのである。

之れ亦野狐の害を免る可く進んで狐に其好物を與へて、其歓心を買はんとする一種の懐柔策に出た遺風であらう。オセンギヨ、センギヨは、御施行、施行の轉訛である事勿論である。

○

丹波には狐に因んだ言葉が多い。氣象、風俗、食物、雜草等少しく正體の判らぬものには悉く狐の字をかぶせるのである。

例へば棧付の板戸でも其裏が襖張りになつてゐる間仕切りの戸を狐戸と云ひ、縱横十字に組んだ格子窓を狐格子と云ふが如く、前者は片面板戸で裏から見ると襖になつてゐるから、人の之を見る目を騙す事狐の如しと云ふ處に因んでゐるし、後者は内側から覗くと良く見得らるゝけれども通りかゝりの人達ちが外側から内を見透し難いものであるから、狡獪で臆病な事、恰も狐の如き構造であると云ふ處に基くのである。

秋の陽の照りながらも時雨するを狐の嫁入りと呼ぶのも狐の樣に人を騙すお天氣だと云ふ意味であるし、深尾女史の謂はれる狐の提灯、狐のたすき、狐のへんだれ、其他狐のかみそり等と呼ぶ雜草も、それ〴〵狐の性癖に似て居るからに外ならないのであらう

○

キヨロ〳〵と落ちつかないで何を言ふやら譯の判らぬ野郎を狐野郎と云ふ。之れに之繞を掛けた男を「狐を馬に乘せた樣な男」と云ふ。「虎の威を借る狐」や、昔の娼婦の別名を狐と言つた等、何れも狐が騙す事から出た言葉である。

○

正體の判らぬ火を狐火と云ひ、旦那と狩人と狐を組み合せて考案された狐拳では、狐は旦那さんを騙すものと想定してある處が面白いのである

○

油揚ゲ飯を狐飯と云ふし、油揚壽司を稲荷ずし又は狐壽司と云ひ、油揚ゲうどんを狐うどんと言ふ。何れもお稲荷さんには油揚ゲを供へる風習と、狐が稲荷さんの御使だと言ふ傳說の二つの事情から歸納的に見出された結論であらう。

○

狐の毛色には銀狐、白狐などいろ〳〵あるらしいが最も普通に見るのは茶褐色である。

眞黑焦げに燒けた燒き飯はうまくないが狐色に燒いた乾餅は誠に賞味される。天麩羅もあまりに揚げ過ぎないで狐色に揚げたのを貴しとする。

嫉妬の場合にも夫婦喧嘩の物凄い處まで行かないで、愛する夫に焦げぬ程度の輕いヤキモチを起すのを狐ヤキと謂はれて、若夫婦間には却て一層の情味を加へるものであるとか聞いてゐる。

○

西洋人の書いた漫畫に表れて來る日本人の姿は脊の低いのに、嫌に顏面が緊張してゐて其眉毛が狐の樣に釣り上つてゐるのが多い。西洋の漫畫家に映ずる日本人の顏は畢竟皆狐面に見えるのであらう。筆者も亦遺憾ながら眉毛の釣り上つた狷介無双の面構へである事を否み難いのである。

○

嘗て有產有閑婦人の間に狐の襟卷が流行つて、冬の服飾界を風靡した事がある。就中銀狐の襟卷なぞは價千金を誇つたものであつたが、其當時でもハルピンやチヤムス邊りでは必ずしもそんなに高くは無くて、キヤバレーの女でさへザラに之を用ひたし、露西亞人の防寒外套の裏なンかに平然と狐の毛皮が使はれてゐたものでそんなに珍しいものではなかつたのである。

嘗て柳人豆秋氏が「犬を好む主人の顏が段々其愛犬の顏に似て來る」のは面白い現象だと仰言つた事がある。

これと同じ筆法で狐の襟卷を好んだ婦人が段々狐の面相に似通つて來る樣に見えたのは獨り筆者の辟目のみだつたらうか……。

○

常陸海岸大洗附近では蛸を釣るのに豚の肉を以てするのである。

さる獵師が豚の肉を下げて蛸釣りに出掛ける途中で、狐に其肉を奪はれてしまつた話もある。蛸釣りが狐に釣られたなンて、凡そナンセンスであらう。

騙されぬ内に此稿を擱筆する。（昭和一七、一一、一三稿）

新會員を募る

松坂倶樂部　川柳講座

▼翼賛制下の常識として川柳を知りたい人▼趣味として川柳を創作したい人▼從來作つてはゐるが、よい指導者がないので一向進歩しないと思はれる人々は▼松坂屋（日本橋筋三）の七階にある松坂倶樂部の廊生路郎川柳講座へ入會されたい。講座は月二回、第一、第三日曜日午後一時から開講（作句・添削批評講義等）會費一ヶ月一回。入會希望者は七階の倶樂部受付へ申込まれたい。

（川柳講座幹事）

同舟近詠

松山　前田五健

眩ゆさがこんな寫眞の顏にした
泡玉も春を知つてるらしく浮き
ま、事にキツプ制ありませたロ

廣島旅行

山陽舘讀めぬ字もある尊さよ
勝どきに首相めがねをかけ直し

仁川　池田可宵

勤等はいらず建設秘話の人
自らも子寶部隊とゞ申し

兵庫縣御影町　長崎柳秀

科學する身には遺傳を寒く讀み
晩飯は歸る積りが奢らされ

結婚披露を詠む

雛壇を抜け出たやうに二人立ち
成功と世間で云ふは金のこと
エプロンも今朝から主婦と云ふ白さ
新聞も見出しだけ見る父の老ひ
子の入試夢に惚き夢に覺め

奈良縣龍田町　鳴田翠峯

女無き家には犬も寄り付かず
トンネルを三ツ越えるとおらが國
上役に可愛がられてまだ嫁かず
優良可親も子供も物足らず

神戸　潮田明坊

合格の子と双親が食べに出る
拜啓も早々もなく子に宛てる
留守番はパン二タ切れのガス捻る
お向ひの子の不合格灯が消える

今治　長野文庫

母親は戰果の度に御燈明
九勇士思へば酒をのむ氣せず

山口縣　三原狂路

ちつぽけな注射へ女眼をつむり
前を行く人の姿も春めいて
虎を見た事も書足す軍事便

名古屋　鈴木可香

兄と住む佳人色紙へ歌を書き

扁桃腺炎に
感冒に
中耳炎に

化膿性疾患の
内服短期療法

扁桃腺炎、中耳炎、流行性感冒、丹毒、面疔、淋疾…その他化膿症に對し、アルバジルは内服により、直接その病原菌を克服、短期間に治療を促進し……

一、發熱、疼痛、分泌物の消退
一、再發の防止……等の目的を達成せしめ得る！

殊に、品質優秀にして副作用少き点＝使用の安全性＝は本劑の大なる長所である！

包裝・二十錠
五十錠・百錠

アルバジル錠

發賣元　山之内藥品商會　東京・大阪

變り種の川柳家

宮尾しげを氏を語る

宮尾しげを畵伯の自畵像

有名無名の川柳家の中に混じつて、超然として、川柳を樂しみ、川柳を作り、川柳のために大きな仕事をしてゐる變り種の川柳家の一人に、わが宮尾しげを氏がある。

○

宮尾しげを畵伯――と云へば、婦人やこどもにまで知られてゐる有名な漫畵家であるが、同時に宮尾しげを氏が川柳家であるといふことを世間では知らないらしい。

川柳家としての宮尾しげを氏を世間で知らないからと云つても、畵伯にとつては何んの痛痒も感じないことではあらうが、新らしい川柳家の聞で案外知つてゐないとあつてはと、少しく紹介の勞をとることとした。

○

先づ最初に、戸籍調べからはじめやう。畵伯の本名は重男、明治三十五年七月二十四日、東京市淺草區新旅籠町十三番地に生れ、現在は豐島區巣鴨六丁目一二九〇番地に居住されてゐる。川柳は震災前二年、毎夕新聞社に勤務中に入門、當時、毎夕新聞社には社員中に、川柳に趣味を持つきん坊（谷孫六）飴ン坊、雉子郎（吉川英治）の諸氏等が勤務してゐたが、氏はその渦中にあつて飴ン坊氏に川柳の手ほどきをうけたそうである。

○

その作品の一、二を次に擧げると、

墓巢は食らひついたる形なり

新聞を見ぬ日うれしく旅に寢る

などの句がある。どつちかと云へば寡作の方らしいが、川柳を樂しんで作つてゐられる氏にとつては、それが當然かも知れない。「墓巢は」は漫畵を句にしたやうな句だし、「新聞を」は心境を素直に詠んだ句だ。これ等の句でも知れるやうに、作品の上では別段に、新らしい境地を拓かれた譯ではないが、川柳のための仕事となると、賣名川柳家が足元へも寄りつけないほどの大きな働きがクローズアップされて來るのである。

その功績の一つに「昭和川柳百人一句」の刊行がある。初篇は昭和九年一月十日の發行で、二篇は昭和十二年四月三十日の上梓である。終篇は「皇紀二千六百年記念句集」として昭和十五年十一月三十日に刊行されてゐる。各篇とも川柳家百人に自選句十句を提出させ、別にお手のものの漫畵像を配し、その畵に作者の句を揮毫せしめ下欄に作者

西日本鐵道人川柳大會記

昭和十七年三月十四日。土曜日。雨後曇。待望久しかりし大會の日遂に來た。客貨輸送に興亞大業の一翼を擔ふ鐵道人の中で同じ川柳趣味に生きる人々が相寄る日が來た大東亞戰下、赫々たる皇軍の大戰果に感謝の誠を捧げ、相扶けて職域に絶大なる奉公を誓はんとする日が來た。

朝來の雨にもめげず、東は京都より西は長崎南は松山實に西日本一帶に亘る大進軍だ。路郎先生は萬的氏を伴つて午後四時着。五健氏は赫堂氏と船で宇品上陸。綠雨氏は御家族御同伴で珍しい顔を見せて頂く。午後六時開會の前後は廣い會場は團欒の渦だ。午後七時半兼席題の締切を終り、久米雄の開會の辭について國民儀禮の後「川柳と地方文化」と題して麻生路郎先生の三十分に亘る有益なる講演は一同に多大の感銘を與へた。

次いで席題、兼題の披講に移り、選者も句主も各其の特性を發揮して滯りなく終了。聖壽萬歲を奉唱して盛會裡に意義ある大會の幕を閉ぢた。（久米雄記）

寫眞說明――（前列向つて右より）半休・芳泉・露斗・春巢・水客・綠雨・久米雄・九天・某人・美禮坊・幽香里（中列右より）蜆露・草雲・子萬的・秋史・楓石・月浦（後列右より）市多樓・志津惠・美奈子・光輝・聽波・たかし・哲史・柳太・可學・井蛙・ひさし・德治郎・鯛好坊・赫堂・志峰・江波・俗善蘆・十鹿夫

川柳人協會後援　第四回西日本鐵道人川柳大會（於廣島縣道縣倶樂部）

の本名、生年月日出生地、現住所、職業、別號柳歴等を掲げてある。一種の昭和川柳史の資料を提供されたもので、その努力と苦心は想像以上のものがある。後年明治、大正昭和の川柳史を編むとしたらこれこそ隨一の文献に數へられるものであらう。

左に「昭和川柳百人一句」の初篇中に描かれた川柳家百人の芳名を採錄して參考に供する。

麻生路郎・麻生霞乃・近江砂人・井上劍花坊・磯部天邪鬼・岩田郷左衛門・海野夢一佛・榎田珍竹林・榎田柳葉女・小川舟人・小田夢路・尾山兎耳・大谷五花村・大野茶喜次・岡田三面子・阪井久良伎・坂下也奈貴三條東洋鬼・志方蝶二・篠原春雨・柴田五萬石・島田天涯子・白石張六・高萬よし・椙元紋太・關口文象・田中金一郎・田中空蟹・田中司馬亭・田中不倒人・花久花酔・平賀紅壽郎・富士野鞍馬・房川素生・福田山雨樓・藤井好浪・藤島茶六・藤田珍茶坊・藤本福造・古谷翁光・坊野壽山・堀口塊人・本田梁花坊・松藍琴人・前田雀郎・小笹樂山・大島蓉明・片山雲雀・金子金比古・笹永睡花・神尾三休・鶴井鈴修・川上三太郎・河柳雨吉・木村小太郎・紀二山・岸本水府・草木鐵舟花・食滿南北・小林不浪人・後藤千枝・近藤飴ン坊・佐瀬劍珍坊・齋藤松窓・田沼湖の人・高木角懸坊・高島玉兎朗・高須啞三味・竹田花川洞・塚越迷亭・佃鑑月寺井紅太郎・長崎柳秀・中沼若蛙・中野懷窓・長野榮二・中村山門・新倉裕待・西島〇丸・西田當百・布部幸男・橋本絲雨・花筒百樹・前田五健・三浦太郎丸・宮坂啞亭・宮尾しげを・宮崎千壽郎・村澤小萩・村田周魚・森雞牛子・森東魚・森井荷十・矢野鍋浪・八十島杜若・山川紫明・山本雨迷・横山巷頭子・渡邊虹衣・渡邊桃太郎

○

その外、柳翁の軸を作製頒布され、「川柳漫畫全集」の刊行については漫畫家仲間に奔走して其の完成に盡される等々、すべてが陰の舞に等しい仕事ではあつたが、その功績の大は沒すべくもない。

○

氏は少年時代に、漫畫家を志し、同じ漫畫家になるなら岡本一平先生の弟子になりたいと思つたが、手づるが無い當時朝日新聞に政治漫畫が出てゐたので、議會へ行けば、何んとか一平先生に近づけると思ひ、十七歳の時、衆議院の給仕募集に應募、まんまと給仕に採用された。しめたとばかりに、一平先生初め他の漫畫家達のスケッチしてゐるのを覗いて、その機會をねらつてゐたが遂に岡本先生に近づくことが出來なかつたので、一冬の給仕におさらばをつげ、寫眞の方で有名な吉川速男氏の世話で、元朝日新聞に居たといふ阿部康藏氏の、ゼ・スピードといふ雜誌へ入社した。ここで編輯の手傳ひをしながら、飛行機に關する漫畫などを發表して、それから岡本先生に紹介され所期の念願を達した譯で、一平先生の弟子中でのナンバーワンであるは勿論、遂に漫畫家中に宮尾しげを氏ありといふところまで押し上つた。しかし、當時先輩諸氏の仲間にくひ込んで行くのは仲々容易ではなく、何か別の方面を開拓するにしかずと、兒童向き續き漫畫を描いた。この時代にはもう毎日新聞から毎夕新聞に移つて「漫畫太郎」とか「團子串助漫遊記」などで次第に賣出して行つたのである。斯うした經歴を持つ氏が、いかに漫畫に精進したかは云ふまでもなからう。

○

氏は又、小咄に趣味をもち原本蒐集家としての第一人者であり、曾て「小ばなし研究」十二冊を自費出版の上、好事家に頒布された。その他兒童向きの續き漫畫の著書は云ふまでもなく、昭和十一年三月には「手と足」（文樂人形圖譜）を、昭和十四年五月には北支蒙疆へ旅した足跡ともいふべき「支那街頭風俗集」を世に送つて紙價を高められたなどいかに氏が多趣味であるかを知ることが出來やう。（完）

川雑津山支部車窓會創立に就て

中國山脈の連峯を脊に吉井川の清流に四時緩るやかに鯉山城を浮かべ山容水明を誇る津山市に然も鐵道職員よりなる川雑津山支部創立を見たのは未だ肌寒い三月十五日のことであつた。此日本社主幹麻生路郎先生には不朽洞會員岡田某人・濱田久米雄の兩氏を伴ひ津山支部創句會に出席された。

午後六時開會、會堤には既に支部員の諸氏は勿論「小林白鳳、橋本石笑藤馬瞰爾樓氏等の美作川柳の人々を合せ二十有餘人參會。

河田一將氏の挨拶、小林白鳳氏の祝辭と共に會場の空氣は愈々高調に達し聽て麻生主幹の「津山支部創立を祝して」の演題の下に川柳生活三十有九年の尊き體驗による柳話を一言一句も聽き洩らさじと滿堂寂として聲なく、今更ながら川柳の深淵さに打たれた。そして皆な言ひ合した樣に川柳研究への堅き決意を肩宇に表らはして居た。

式次も愈々進み兼題、席上吟の披露賞品の授與等無事終了、十時半皇軍將士の彈榮と支部發展を祈念し萬歳三唱の後芽出度く散會した。

翌早朝、麻生主幹には前夜の痛れを慰する間もなく某人氏と共に支部員及白鳳氏の案内にて院ノ庄に兒島高德侯爵の時に名高い作樂神社に參拜され即吟句を神前の雅帖にとどめられ

人と櫻兒島高德以後の路郎

つゞいて某人氏の

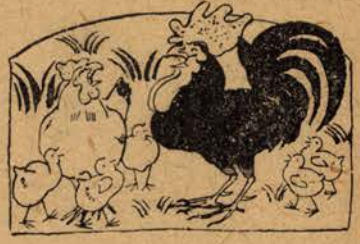
忠志不死古蹟の上を雲が行く　某人

の名吟を奉納された。それより鯉山城聚樂園の早春を尋ね午後三時五十分支部員等の川柳精進の誓と再會の約を交しつゝ鐵路靄阪された

寫眞說明

前列向つて右より宗友麻生路郎・河田山月・一將・濱田久米雄・白鳳・清水・中井・福田燦・中野蛙遊・岡田某人・小林・丸尾青風・大石次郎・藤田天風・大石撚・二宗向洋・中野平・後列向つて右より石江・菁石・宗田茂雄・田中陽山・政山・朝月・高取紅・

川柳雜誌社　津山支部創立句會



七號室雜記（へんしうしつから）

▼いつのまにか上着を脱いで机に向ふころとなつた。編輯に携つてゐると、月日の經つのが實に早い。カレンダーを二枚づゝ剝いでゐるやうな早さだ。

▼四月十八日の午後、アメリカの飛行機が、はじめて本土を空襲したが、大阪や堺では空襲警報が鳴り響いただけで途に姿を見せなかつた。みんな張り切つて戰鬪帽の顎紐をかけてゐたのでおそれをなしたのであらう。

▼ラジオや新聞の報するところによると帝都でも、名古屋でも、神戸でも神經戰程度で被害は至つて輕微であつたとのこと。何れにしても油斷は禁物である。

▼前號の表紙は「タイ國の古典舞踊」であつたが、本號では「バリ島に於ける裴羅門教の鬼面獸の洞」を紹介することにした。

▼「武玉川四篇研究」が本號で終つた。いつもながら、壓山、東魚、省二三氏の尋常でない努力を思はされる。讀者と共にその勞に謝意を表したい。いよ／＼次號からは「武玉川五篇研究」の發表である期待を乞ふ。

▼「吟行地讃べ大和篇」の續稿は本號から「川柳の近畿大和篇」として發表することゝした。「初等川柳講座」も鍵骨碎身で執筆してゐるが豫想外に好評なので、苦心の仕甲斐があると思つてよろこんでゐる。

▼掲稿「ニッポン語の南進と川柳」は、川柳南進への序論である。現在兵隊とともに川柳は南進してゐるが今後は南進邦人の間にも、南方民族の間にも川柳の攪かりをもとめてやまないつもりであるから讀者諸氏も微意のあるところを體して協力ありたい。

▼「中堅作家に聽く」の座談會は四月十日の夜、本社で開かれた。話題が私のことに及んでゐるので、發表するのにおもはゆい點もないではないが、そんなことを考慮せずそのまゝ發表することにした。

▼小畑自有浪氏のお隣組のためのお座敷芝居「熱」は例によつて氏獨自の畑を耕したものである。

▼「川柳類題索引」は曾て、安井ひろし、越村加香、安井欣女の三氏を煩はし、五十九號までを本誌に發表し、いろ／＼の意味から役立つたものである。ひろし氏は目下徐州に、加香氏は普信下通、欣女氏は故人になつた。たんとかして續けたいと思つてゐたのを竹内機見女氏が引受けてくれて、百七十九號まで整理、次いで百八十號から松浦帆船氏の手を煩はして、とう／＼二百十五號まで

一路集

募集句

農村

普天選

農村のラジオに夜遊び寄つて來る　小城子
田植時誰も居らんと兒が二人　彌生
農村の誇りは甲種斗りなり　愚坊
今更のやうに農村認められ　正柳
藁の家こゝに軍神生れたり　障子
村の常會いろり圍んで眞面目なり　北辰
不在地主俺の田地がまゝならず　臥牛
鍬洗ふ小川に月がまんまるい　綠葉
收穫を確めに來るお役人　青々子
鍬をとる村長さんの赤い髮　一角
畦道を走つて來たはいゝ便り　不二
配給に馬橇で村からやつて來る　怒來步
農村は豆があるらし慰問品　泉泡
遺言を素直に遵つて野良に立ち　志都緒
嫁いた姉も交つて田圃の農繁期　子盛
農村の乙女戀なぞ知らぬらし　祥月
農村の煙風呂なぞ沸かすらし　鷄城
電髮が村で噂の種を蒔き　八重
勳章は神棚にあり鍬振ふ　千斗
嫁入りの仕度秋蠶も飼つて置き　抱逸
停年に歸農の覺悟感じてか　一聲
農村を捨てゝは出たが喰へもせず　浩
農村は何と云つても有難し　同
稻刈りに國防色の奉仕隊　猪三郎
男手が足りぬと云ふにこの稔り　同
農村に歸れと山が呼ぶ樣だ　若榮
農村に生れ兄弟博士號　同
田圃まで媒酌人緣談持つて來る　カズヱ
種蒔へ母除曆を出して來る　同
秋すんだ暇に齒醫者へ行くつもり　詩朗
村長へ畦から大きく頭下げ　同
おらが村これで二度目の優良兒　神風
農村の出であるそうな時の人　同
種を蒔け何がなんでも增產だ　香林坊
太陽の眞下農家の惡なし　同
鍬の柄ではたく煙管の立話　治男
もう二度と都へ行かぬ鍬を持ち　同
(佳)食糧難農村高く認められ　可學
(同)衣料制どこ吹く風と鍬振ふ　神風
(同)初生りを駐在さんへ屆けたり　千斗
(同)父さんは征き母(オカサン)は田圃(ヨナ)　美奈子
(人)肥料問題村長さんに任しとき　詩朗
(地)明日使ふ鍬にあれど洗はれる　吟平
(天)遺家族の田へこつそりと送る樋　神風
(軸)農繁期和尙託兒所引受ける　普天
(同)將軍の展墓に農村は湧きかへり　同
(同)今更に農村感謝の夕とか　同

選後に—農村の句は難しい、殊に大都會に住む人々には捕へる所のない題材である。視野の狹い句の多いのを遺憾に思つた。農村と云ふよりも農民、老農と云つた句の多かつたのも止むを得ないであらう

漁村

久米雄選

漁村から章魚を土產にやつて來る　彌生
漁村の娘その純情が親しまれ　正柳
潮騷へ古老の感が動くなり　カズヱ
赤褌漁村の朝を凛と出る　杜的
漁村の子慰問袋へ貝を入れ　神風
漁村もう皆んな起きてる朝まだき　小城子
白砂青松漁村へ勿體ないところ　可學
夕陽浴び漁村へ急ぐ八丁櫓　於福
氣も輕い汗大漁の朝の濱　一聲
漁村まで入れて市制を布くつもり　迂咄
エンヂンの音から漁村明けかゝり　波人
雨の日の漁村靜かに暮れており　一角

の分類をしたので、一號から二百十五號までを編輯局で合議家號綴表することゝしたのである。

▼寫眞を觀て、それを直ちに川柳にしてゆくことも一つの興趣である。本號では福井哲氏撮影の腕角力の寫眞を前田五健氏に囑して、句にして貰つた。

▼戸田孤逢氏は「川柳世界史」をこつ〳〵と編んでうむところを知らない。

▼其の他雜文では小山文三氏の「丹波の狐」長野文庫氏の「榮園雛」寺井鋭々氏の「旅から」等々がある

▼戰鬪帽で、机にカジリついてゐる八百屋には、ちつとも親しみを感じませんなアとM氏が談してゐたが、なるほどなアと思つた。八百屋自身にとつても机にカジリつくことは苦が手に違ひないだらう。本社の鳴尾時代には出入りの八百屋がゴンドラの唄をうたひながら注文を聞きに來てくれたものだつた。兎に角、人と人との折衝に、うるほひがなくなるといふことはおそろしいことだと思つた。しかし、それもこれも世界の大きな動きが、そうさせるのであつて、八百屋だけを切り離して考へることは大變な間違ひの元だ。アメリカが日本の力を過小評價して經濟封鎖で凹まそうとして失敗したのも、アメリカがアメリカ自身だけしか見てゐなかつたゝ證據だ。みんなが柄にないことをしたければならぬほど、人類にとつて、それほど大きな不幸はあるまい。一意職域に邁進することである。私たちにとつて、それより善事はない筈だ。（路郎生）

谷脇素文・編畫

一家揃つて朗かに!! 絶好の家庭讀物と大好評

川柳漫畫傑作集

決戰下日本の世態を描破し、人情の機微を穿つた名川柳漫畫の大集成、笑ひの中にピリッとくる諷刺教訓、獨特の風趣の筆に前線銃後躍如たり。之こそ家庭慰安となり、前線將士も大喜びの鄕土便りとなる絶好快適の書。

慰問袋には是非この一本を

定價一圓五十錢（送料十五錢）

和田邦坊著

世渡り問答

一圓二十錢（送料十五錢）

書店にあり・大日本雄辯會講談社

「海兵募集」漁村の角へ張出され　抱逸
地曳網 水兵志願の子も混り　千斗
漁村今注意を要す風となる　不二
地曳網今朝も日本晴れとなり　吐空
大漁の旗に夕日が映えるなり　緑葉
漁村の子まだ父ちやんは歸らない　若榮
征かぬ家は一軒もない濱の村　葉光

村中の出迎がある八丁櫓　鷄城
戀の字が波に消されてゆく漁村　美奈子
村中へ鰯の群が來た知らせ　詩朗
春の陽へ地曳の網を干してをき　同
（佳）漁村今太平洋の陽を拜む　一聲
（同）寫生畫の漁村へ雲の偉大なる　鷄城
（軸）大捷へ漁村南の風が吹き　久米雄

旅から

寺井鋭々

○

H君

柳の芽が、青くなりつゝある銀座を人に混つて歩く。

細い露路の上に、「みつまめをギリシャの神は知らざりき」といふ行燈が「月ヶ瀬」といふ屋號看板と並んで、ぶら下つてゐる。

川柳の魅惑、甘い物の魅惑で、入つて見やうかと思つたが、若い女連が三々五々、狹い階段へ續いて行くので、順番を待つのもいやだと止めにした。

後で人に聞けば、しるこは此頃の御多分に洩れず、小豆三粒ほどの、甘味の薄い砂糖湯式で、みつ豆も水臭いこと夥しい貧弱さだとの事、それよりは「青柳」といふ舗のしるこや餡みつ豆は、甘くておいしい、但しこゝは一定の時間中に限るとの事であつた。

しかし食べ物屋は、どこも中々繁昌だ。

○

J君 今日は靖國神社へ參拜しました。

神苑の櫻の下で、社頭對面にはるばると來た、各地の遺兒部隊が、お辨當を食べてゐました。

遺兒達の姿を見て、憐れを感ずると同時に、亦これ等の子供達は、却つて幸福であるやうに思へました。

それは父や兄を失つた寂しみは、勿論皆持つてはゐるが、父や兄が靖國社に祀られてゐるといふ大きな事實は、終生身を處して行く上に、頭から忘れ去らないでせう。子供時代の教養に、成人の後の精神の上に、父や兄の大きな神が及ぼす力を、受け得られることは、欲しても得られない特典を持つてゐるわけではありませんか。

嬉々たる中に、さすが靜肅を保つ子供達を眺めて、哀憐の涙と、祝福の祈を以て、暫く立つてゐました。

○

S君

赤坂山王の日枝神社の參道を行く。

緑の樹の中に櫻が滿開である。

小さい子供が二三人、ヒラ〳〵と枝を離れて來る花びらを、地に落ちるまでに掌に受けやうと、手をひろげて追ひ駈けてゐる。

樹を洩れて來る日影は、土の上に縞のやうに、降り灑いでゐる。

都會の中とは思へぬほどの、閑寂な空氣が漂つてゐる。

春晝の午後三時。

○

U君

大きな硝子張りの室の中アームチェアで煙草を喫ふ…煙草の煙がゆら〳〵と立つ…煙の先に又雲のやうな煙が擴つてゐる…霞む海を隔てた大島の御神火の煙でした。

廣い芝生の先に草の丘がある…丘の向ふに林がありその先に灘の波が光る…灘の上に山が續き、伸びて山脈をなしてゐる…その山脈の上に一際斬然と高く、眞白な山が聳えてゐる…びつくりするほど白い富士山でした。

伊豆川奈の南面と北面の景觀です。

★

川協のベーゼ
柳界展望

國防獻金藝能文化展會場（仁徳公園）に於ける池田市長氏

催

▼本社主催四月旬會は四日午後六時御津八幡宮に於て開催▼松坂倶樂部麻生路郎川柳講座は五・一九の兩日なほ十九日は堺方面（仁德天皇御陵・大安寺・南宗寺・堺水族館）に吟行、堺市商品陳列所に於て開講▼有恒倶樂部川柳講座は九・廿三の兩日午後五時開講▼阪大川柳會は十七日午後四時▼警察病院川柳會は二日廿一日午後四時半▼川雜尼崎支部四月旬會は三十日午後時尼崎昭和荘に於て開催▼川・雜堺支部卯月例會は十一日午後七時、駒井昌坊氏邸で開催▼朝鮮川柳協會では四月三日京城府民館に於て總會及作句大會を併催▼大京都川柳社では三日正午民政會館に於て京都柳壇統合結成の一周年記念川柳大會を開催

消息

▼川雜城南支部の好崎申仙、杉原大研子、清水白柳子（熟れも不朽洞會員）の諸氏は四月三日和歌山陸軍病院を訪問、なほ當日は路郎主幹も行を共にし川柳慰問講演をされた▼濱田久米雄氏（不朽洞會員）岡田某人氏（不朽洞會員）は三月二十二日共に來社主幹と歡談▼山田蓍歌氏（仁川）三月二十七日來社された▼津田麗月冠氏（朝鮮）は四月四日來社▼藤本水源氏（熊本）は四月九日來社▼杉原大研子氏（不朽洞會員）は三月中旬樺太方面を旅行、「樺太の土産は雪の話だけ、敎はつたまんま吹雪へまともにて」大研子（十九日來信）▼正本水客氏（不朽洞會員）阿萬万的氏（不朽洞會員）は四月初旬共に富士山麓を川柳行脚された▼夷一笑氏（不朽洞會員）は四月十三日一家を擧げて姫路へ歸省された「國寶の城の眞下の花吹雪葉櫻の高さへ子供さしあげる」一笑▼田邊由布氏（菁屋）は四月十五日嵐山より來信「いゝ景色半島の唄も流れて來」由布▼吉田水事氏（不朽洞會員）の勤務されてゐる株式會社山武商會は、山武工業株式會社と商號を變更された▼福田山雨樓氏（不朽洞會員）は四月二十七日夜、不朽洞へ來訪され主幹と歡談、一泊された▼北山悟郎氏（大阪）の令息明氏が此程歸還された▼山本葉光氏（大阪）の令兄幾太郎氏も四月上旬歸還された

弔

▼津田麗月冠氏（朝鮮）の母堂は三月十五日永眠された。なほ戒名は德雲妙相信女、享年六十五歳。謹みて悼む▼岡村和郎氏（川・雜尼崎支部同人）は豫て入院療養中であつたが四月十五日行年三十二歳を以て永眠謹悼▼森田カズヱ氏（奈良縣）の令弟は三月二十六日逝去された哀悼の意を表す

轉居

▼大西八歩氏（不朽洞會員）は大阪市南區順慶町二ノ三二、杉森方へ▼松浦帆船氏（大阪）は港區磯路町三ノ二四へ

社の回覽板

★川・雜港支部幹事更迭。舊幹事濱本みのる氏の幹事辭任により、吉田湊万氏が新たに其の任を負はれた。一層の發展を期待する。

★明石・柳次氏（麻生霞乃女史紹介）水谷竹荘氏（麻生霞乃女史紹介）が不朽洞會に入會された、今後の御奮勵を祈る★川・雜本社句會の案内名簿を目下整理中である。出席御希望の方は住所姓名雅號を詳記の上川柳雜誌社内句會係宛に申込まれたい★不朽洞會へ入會を希望される方は會員の紹介により申込まれたい★川雜投句用箋一部十五錢送費三錢のところ郵税が四月一日から改正されたので送費を四錢と改めた。お含みを乞ふ。

★先月號が主幹の病臥と旅行のため遲刊の止むなきにいたつたが本號も取戻しがつかなかつたことをおことわりする。

麻生路郎著
新川柳評釋
定價〒 〇・八〇 〇・〇八
本節の川柳で一粒選りの名句を選み、その一句一句に、不即不離の評釋がしてある。

石曾根民郎著・麻生路郎序
句集 大空
定價〒 一・〇〇 〇・〇八
著者は信州の人。心の底にとつと慎いてゐたものを素直に吐き出したといふ篤人句集。

麻生路郎著・柴谷宰舟畫
累卵の遊び
定價〒 一・〇〇 〇・一二
名句に名評釋がしてあり、恰例となる句が澤山選めてある漫畫三十二葉挿入。

阪大川柳會編纂・麻生路郎序
句集 大川端
定價〒 一・〇〇 〇・〇八
大阪帝國大學醫學部醫學部の阪大川柳會が編纂した會員の傑作集

堺市出島海岸通二丁一八二
發行所 不朽洞
振替大阪三〇三九二番

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規▼用紙は原稿用紙▼文字を正確に▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社宛

本社四月例會

四月四日　於　御津八幡宮

本社四月例會は四日夕刻から御津八幡宮に於て開催された。花見時ではあるが、さうした方面の外出を控へられたものか、多數の出席者のあつたのは銃後國民緊張味の表れであると、大いに意を强くする次第である。當夜は神戸から小城子氏、有恒倶楽部からは青美氏が出席された。路郎主幹の講演は「句會雜感」と題し、新人が會場で作句される場合の心構へを話され、同時に又、古い作家の頭力的な作句を誡め、今後は入選や沒を考慮する事なく、自己の新らしい試作を句會でも發表し、各選者の師にかけて見る事も必要であらうと說かれて降壇、なほ五月號へ掲載される寫眞川柳は松山の前田五健氏に依頼したので句會での作句は休む事とした。（幹事記）

出席者（順不同）

路郎・香林坊・翠光・玲之介・誠一・紫香・紫津・帆船・鷹丸・久人・綠雨・美奈子・湖心・小城子・千斗・彌生・阡淵・默平・青美・恒明・綠葉・文雄・九一・鮎美・綠風・丹路・吐空・かほる・夜王・豆秋・行春・北辰・栞・白柳子・アート・馥乃

席題「附き合ひ」　五選

附き合ひと云ふ顏色で　鬪つて來　翠光
附き合がよすぎて狹いとも言はれ　玲之介
話はづんで　附合ひほうつ　とかれ　久人
附き合で　唄つた聲を　賞められる　千斗
附き合ひもあらうと驛で母の慈悲　阡淵
附き合うて五圓なにがし損をする　丹路
附き合へばそれ　程でない　よい男　湖心
附合は　見たてた　柄を　逆らはず　默平

席題「入　學」　かほる選

入學の朝へ大きな子の寢息　綠葉
入學へ校長さんの眼がやさし　千斗
入學へもう先生の名をおぼえ　久人
入學のどの子もかしこい顏をして　夜王
入學は長男らしい父若し　彌生
入學のそれから眼鏡かけはじめ　九一
入學へ父の笑顏も寫される　鷹丸
入學が出來自轉を乘り廻し　豆秋
入學の夜の慰問文長くなり　帆船
入學の日はきつちりと鬪つて來　香林坊

席題「常　着」　綠雨選

常着着て　座ればそ　案外したしまれ　久人
トランクへ常着都の　驛につき　帆船
夕立へ　常着あつさり　駈けぬける　九一
日曜の朝を常着に起される　默平
近道を常着のまゝで送られる　紫香
組長へ常着の襟をかき合せ　かほる
かたみ分け常着に似合ふ手許なり　北辰
姑は常着でよいと口を入れ　香林坊
附き合ひは常着のまゝで出かけたり　豆秋
勇士の　母常着のまゝで寫される　美奈子
常着にも新妻らしい氣をつかひ　翠光
珍客へ常着の襟をかき合せ　美奈子
風呂敷を下げた常着の夫婦連れ　紫香
法善寺　常着のまゝで　拔けて行く　恒明
日曜の　常着へ　子供がまとひつき　綠葉
えらいことしたと常着で飛んで來る　恒明
花の留守常着が二枚ぶら下り　かほる

席題「通　勤」　夜王選

新米の通勤少し早過ぎる　行春
通勤は電氣時計を當てにせず　千斗
通勤が樂しい青春のハイヒール　美奈子
通勤へ今朝の市電は旗を立て　千斗
通勤は列の横手をぬけて行き　帆船
通勤の母託兒所で子と別れ　恒明
通勤の女土筆を摘んで去に　香林坊
通勤の自轉車雨の夜を走り　鮎美
朋輩の聲通勤の足を止め　かほる
通勤に氣儘がとれる歲となり　阡淵
天丼とざるに通勤定めてる　白柳子
通勤の魚籠をのぞいて來た話　栞
通勤の隣も門を開ける音　紫香
通勤の今朝タンポポをみつけたり　栞
麥伸びるのを通勤は樂しんで　白柳子
通勤の眞先に門くゞるなり　夜王

兼題「借　家」　丹路選

制限令借家でんなに儲からず　香林坊
金槌も小さく叩く借家也　青美
同窓のよしみ借家の世話もする　美奈子
お隣が家主で無理を云ひそびれ　香林坊
借家難どうかと思ふとこへ住み　翠光
いゝ借家其の表札を寫と書き　紫香
卷き紙に書く日借家の手暗がり　かほる
借家の戸はね返る程開かぬなり　帆船
新らしい借家が待つてゐる旅行　九一
行李一つ二つで借家から借家　默平
借家法知つてゝとかく角が立ち　小城子
郊外の借家畠も少しつき　紫香
家借りてゐる氣樂さへ陽があたり　香林坊
借家の天井鼠の子が生れ　鮎美
仲人は借家も一緒に探して來　吐空
借家人空地と見れば種子を播き　千斗
借家ではそう贅澤も言へもせず　湖心
借家から借家へ越した五十年　彌生
稅金は拂ひ借家へ戻つて來　鮎美

兼題「上　京」　路郎選

遺兒上京九段の櫻しかと見よ　丹路
上京へ母は一枚入れ添へる　夜王
上京の關西辨が氣にかゝり　彌生
晴國を一度は見たい老母を連れ　綠葉
上京へ細いもので二圓貸し　かほる
計畫の中へ神田の日も加へ　孤蓬
眼ぶらの靴お上りさんと知れ　香林坊
上京へ定期要る程通ひつめ　帆船
ゑらい人の名刺をもろて上京し　豆秋
上京に三割高い切符買ひ　白柳子
東京はまだか〳〵と汽車の中　綠雨
老骨をお役に立てる上京さ　恒明
上京の度に地下鐵延びてゐる　小城子
上京の君の眼鏡の度が强し　鮎美
上京へ空氣枕を忘れて來　綠葉
上京を春に延ばして家を建て　かほる
上京は二時間だよと飛行服　角堂
軍神の母上京を寫される　恒明
役得で上京をするさくら時　豆秋
上京を電話で知らす父の聲　綠雨
三度目の上京やつぱり地團を持ち　小城子

飛行機で ちよいと上京して 戻り　豆秋
上京は叱る恩師を先きに訪ひ　默平
上京の眞直ぐ二重橋へむき　紫香
理事として上京 しかし三等車　白柳子
あこがれた銀座戻つてくさすなり　葉
上京の太郎冠者になり濟まし　鮎美
出額の上京靴一つ持ち　紫香
灘の酒しつかと持つて上京し　綠葉
上京のカタログだけは持つてゆき　鮎美
商工省大阪辨はなれてゐる　翠光
上京が社の運命を背負つて來　路郎
上京はしたがやつぱり講義錄　同

川柳人協會後援

第四回西日本 **鐵道人川柳大會**（廣島）

三月十四日　於　廣島鐵道倶樂部

赤道を勝閧縦に貫けり　江戸子
老人が居て神棚の花あをし　紫花
札束を見せてほつ〳〵筋に入り　江波
これ位捨身でやれと言ふ主任　光輝
眞ッ二つ日本刀の味はこれ　可學
床の間へ遺愛となつた日本刀　愛鳩
丸刈で征く吾子の脊に母小さし　柳石
同郷のよしみ保險をすゝめられ　鯛好坊
憎らしく頑張つてゐる滿員車　穗波
勝閧は地上部隊へまかしとき　鶏城
月の出へ死の靜けさの敵都浮く　同
泥まみれ血まみれ報告までの息　不水
日本刀床を飾つた祝の日　美穗坊
神となる子へ神棚を半座開け　井蛙
勝閧へ山の谷も聲をあげ　同
丸刈にする氣默つて内を出る　赫堂
頑張つた男同志が泣いてゐる　志峰
不時着に日本刀が有るばかり　哲志
靈當り母の偉大な愛に生き　同
日本刀愛機へ確かと持つて乘り　草雲子
我が骨も相手次第で粉とならん　曉露
神棚へ働く朝の手でともし　幽香里
馬も泥兵も泥默々と征く　同
トンブクをのんで銃後を頑張る氣　半休
赤道直下日本刀は寒むがられ　同
勝閧にしばし待合室ゆらぐ　蘇堂
日本刀歸還する日の神に入り　同
二階借眞正面から月が出る　月浦
丸刈の最後の夜を母とゐる　美奈子
頑張つて來いよと恩師の弱い咳　同
捨身の今日母の給仕の箸を取り　同
頑張つて歸るぞ海の色青し　露斗
月の出へ捨子の顔ははすに向き　同
月の出へもう一匹が釣れて來す　十農夫
御召待つ日本刀に曇なく　同
同郷を訪へば下宿の隅にゐる　柳太
裾の泥拂つてベルへ手を伸ばし　同
勝閧のまだ海があり山があり　久米雄
勝閧の中で白木の箱匂ふ　同
神棚へ空地で出來た物を上げ　秋史
横つ腹の蚤取る猿の伸がよし　市多樓
同郷と云ふ親しみへ茶をすゝめ　同
陣中閑しみゞ〳〵刀を拔いて見る　萬的
捨身だと云ふ血相に壓されたり　同
肉塊が殘つたゞけの人柱　俗善藤
人柱となつて不孝を詫びるなり　芳景
見返してやる鉢卷をしめ直し　同
受けついで征く日本刀よく光り　九天
頑張れと氏神樣の鳩がなく　同
丸刈で行けばお醫者も見違へる　春巢
眞ん中へなか〳〵切符切りに來す　同
身を捨てる覺悟樣の外で決め　水客
勝閧の軍靴の下は春の草　同
言ひたいことを言うて貧乏人强し　某人
勝閧は男の腹の底から出　同
月の出へ開く手紙はセンチめき　綠雨
札束を積んでこれから拂ひます　同
花と散る捨身に神の扉はひらき　五健
頑張れにたゞうなづいた子のひとみ　同
捨身になれと老ひたる父は突き放し　路郎

川雜 **梅田支部句會**（大阪）

三月二日　鮎美報

子のよろこぶ貝もありて波の泡立ち　石竹
鮭のあたまが鍋にあり獨もの　鮎美
大平洋我が軍艦にせばめられ　秀峰
軍艦旗日の出の色をあびてゐる　治男
大戰果無言に語る軍艦旗　綠葉
軍艦のある日見知らぬ魚と合ひ　由布
軍艦マーチ大根刻む手が止り　かほる
旅の宿獨り居れば獨りの壁の色　卜居
呼鈴を押せばほけた顔でくる　同
仕事からかへる大阪やつたらなあ　同
宇部と云ふ所へセメン吸ひに來た　同
スキッチを切り速達の意味判る　鮎美
歸還して短靴はいた輕い音　阿佐緒
乘客の短靴みんなよく光り　治一
四方拜けふは素直な短靴の紐　清子
短靴の踵のとれたまゝ儲け　鮎美
短靴の紐きつちりと初對面　由布

有馬吟行

三月十五日

送られて歸る湯の客獨活を持ち　三司
淵へゆく道營に立ちどまり　鮎美
湯の色をかたる三つの顔が浮き　由布

川雜 **四ツ橋支部句會**（大阪）

翠芳報

戰友も無事に降りたか落下傘　夢想
幸福がだん〳〵解り四十過ぎ　かほる
幸福だなと新婚おだてられ　綠雨
待ち合せ帽子の型を直すなり　かほる
待ち合せ見られてならぬ人に會ひ　青雲
待ち合せ途中の事故を話すなり　綠雨
雄辯のその口に乘り裏切られ　秀甫
裏切つて世間を狹く見て暮し　翠芳
恩人は粗末なパイプを咥へとる　同
恩人へ贈る最後の書殘し　夢想

川雜 **尼崎支部句會**（尼崎）

三月二十二日　於　昭和莊　美知夫報

釣舟でかくれてしまう島に住み　寄與史
急行で見る島々がちぎれ行く　同
島めぐり島の悲劇も聞いて來る　同
島の灯を見つめ連絡船にゆれ　同
此の島でラジオあるのが二軒だけ　八櫻
遭難は島一つさへ見えぬとこ　同
カタカナの島が擴うた占領地　同
お守が派手に目立つも新入者　寄與史
新入者繃帶さむく見て通り　同
新入者髭ある人を見覺える　同
軍歌ふとまめのことなど忘れてゐ　正路
歸還兵軍歌にまぶた熱くなり　美知夫
子の軍歌親も調子を合せて居　同
島籠の眞下の庭の芽が青し　鮎美
割箸をあてなくためて母は老け　寄與史
陳列へ割箸だけのあるすし屋　正路
父と子の割箸山は青かすみ　鮎美
軍歌で出れば内種とも見えず　八櫻
柳の芽ばしボートを樂しませ　正路

川雜 **下關支部句會**（下關）

四月三日　半休報

野望抱き故郷へ別れ行く汽笛　草路
踏切氏汽笛と共に日を送る　遇連坊
驛近く住んで汽笛をかみ分ける　鯛好坊
トンネルへ這る汽笛に窓をしめ　半休
急汽笛停車と共に窓に顔　苦笑
日本の汽笛昭南驛に澄み　九呂平
だしぬけの汽笛にパット散る野鳩　三岳

ゴム林の向ふは敵の逃げる音　市多樓
一つしか無きゴムまりとは犬知らず　穂波
○○と書いた便りへゴム一葉　井蛙
ゴムホースつまるまでまだ足らず　余志雄
ゴムまりを話題に子等は地蹴を見る　九呂平
ゴムの無い鉛筆誤字へ假名をつけ　牟休
砲煙の中日の丸が浮いて出る　米三
砲煙が晴るれば元の國でなし　鯛好坊
手におへぬ子であつて今日の戰果　穂波
あれも手か我町燒いて敵は逃げ　市多樓
節くれた手が鍬の及を銷させず　不川
拱手傍觀今度濠洲見殺しか　井蛙
重さうに列車は動く助役の手　三岳
搾取した手へ白旗をあげさせる　不川
傷付いた手へ日章旗握りしめ　光輝
石油を持つたばかりに國を捨て　鯛好坊
盆栽の伸びんとすれば芽を摘まれ　米三
降伏をせねば擊沈するばり　市多樓

雜川　堺支部句會（堺）

二月二十六日　角堂報

陷落をぜんざい煮いて祝ふなり　豆秋
陷落も一千キロの過去があり　喜堂
陷落だ酒だビールだ御祝だ　詩朗
陷落へ胸の遺骨を高く上げ　喜堂
陷落にもう日本語がはじを利き　波夢造
突擊の喇叭傷兵遠く聞き　同
突擊の足へ兎が突き當り　喜堂
突擊を何邊しても敵はゐず　詩朗
突擊をやり直してる點呼場　角堂
突擊の拍子が拔けた白い旗　豆秋
日本に魚雷を抱くと云ふ言葉　同
魚雷とは氣付かず空襲かと思ひ　角堂
こがアノ…などと魚雷を撫でて見る　波夢造
魚雷發射漸く手應へ待つながさ　詩朗
魚雷群かに陳列室の夕まぐれ　波夢造
十二月八日前に既に神　豆秋
潜航艇思ひもよらぬとこへ浮き　波夢造
潜航艇軍神許りの乘込だ　角堂
潜航艇月光浴びて浮き上り　詩朗
潜航艇空氣の味を知つて居る　同
海戰へ佐久間艇長思ひ出し　同

雜川　松山支部句會（松山）

三月二十日　耕一路報

早駕の通つた道をツバメ號　五樓
絶景で居眠りしてる駕の客　拓水
早馬に早駕續く一大事　晴朗
戻り駕中で姉御は酔つて居る　赫堂
雲助は煙管を駕の柄で叩き　耕一路
雲助の背の龍躍り駕ゆれる　同
山櫻駕をなゝめに吹きぬける　五健
駕ホーイホイ東海道は春となり　赫堂
駕止めて天下の景へ暫し立ち　晴朗
籠へうつら〳〵と駕の客　五健
ふり袖か駕をこぼれる春の山　同
駱駝君旅藝人の仲間入り　一樓
背の瘤だけは駱駝の重荷なり　緣風
頸の鬚だたらら、ららと駱駝起ち　耕一路
ラクダ行くなんぼ行けども地平線　五健
叱られてくた〳〵くなと起つ駱駝　同
灰皿も大株主と云ふ誇り　同
すくすくと伸びて少年夢多し　蓮生
少年工働く姉と居て愉し　五樓
灰皿の掃除小言も出る女中　花之助

雜川　三池染料支部句會（大牟田）

三月十三日　蝶人報

合併に村の氣持もくんでやり　一葉
移民村日本の顔をつぶさぬ氣　抱逸
空襲もうけず平和に稻が獲れ　梅春
子の頭ほめて二學期勵ます氣　抱逸
横に振る頭へ敵は無條件　世志一
先づ頭下げて怒をじつとしめ　くろだ
交際に呑めとアグラのいゝ氣嫌　國雄
交際をつゞけ人格認められ　末男
交際になれてお世辭が旨くなり　十代紀
交際が上手他人からねたまれる　世志一
貧しくも交際丈は續ける氣　平人
ポケットの妻が押へた交際費　抱逸
冗談も言へぬあの娘の身だしなみ　路村
冗談もたまに課長の人情味　坂本
冗談が本氣になつた酒の席　子盛
體力と氣力で多忙きりぬける　鱗水
兄の分働くつもり農繁期　同
聲沈聲沈潜水艦の忙しさ　梅春
子が一人增へて多忙な妻となり　森本
多事多端ドッシリ据えた大和魂　藤樓
忙しい百姓さんへ雲雀鳴く　初舟
工場の機械年中多忙です　美弘

雜川　小郡支部句會（山口縣）

井蛙報

鮮人の服が目につく春が來た　多吾作
春の椽日向ぼつこの猫は立ち　曉露
こんな驛櫻の頃を見上げられ　同
春日和牡丹の蕚を取つてやり　凡骨
まゝごとの遊びに刻む春の草　喜樂
二等客新聞だけは置いて降り　凡骨
有閑は廣告にまで眼を通し　城東
出勤の朝を新聞立つて讀み　游記
配達がまだやつてこん日曜日　牟休
居候なすこともなし腕をなで　東光
腕時計石鹼つけてから氣付き　牟休
口八丁されど昔の腕でなし　井蛙
王手飛車もつたばこは灰になり　曉露
たばこ屋へ兄弟列の中にゐる　牟休
一分隙たばこ一本あつたゞけ　哲志
圓陣をたばこが廻る小休止　井蛙
勝閧へ土人も聲を合せてる　哲志
一億の勝閧今や印度まで　昭宏
勝閧の聲曉の村の森　市多樓
勝閧にあがる日の丸どつと搖れ　一生
勝閧を胸に抱かれて戰友もきゝ　凡平
勝閧へ瞼の濡れたのへ氣づき　市多樓

雜川　仁多支部句會（島根縣）

二月二十八日　於　役場　一聲報

日本の廣さは雲の續く空　奏柳
先生の笛體操へ並ばせる　一夢
雲行きに旅先きの人案じられ　正桑
體操へ體力章の胸の幅　喜代志
體操へモンペの意氣が揃ふ也　武之助
ラジオ體操朝の綠へ胸を張り　花生
お隣りへ鶏を頼んで共稼ぎ　早苗
默禱へ馬から降りた部隊長　史朗
女房の留守また今朝の菜を出し　同　雅舟
釣竿に入道雲の影がさし　榮川
店の鶏預る程の子の出世　同
兵殺つか驛へ小旗の波がより　一聲
出世して踏むプラットは普を立て　同
雲に月隱れる度に兵走る　同

雜川　神津支部句會（大阪）

三月十四日　於　伊太古居　香林坊報

戰線へ謝して座蒲團あてる母　林笑
座蒲團も社長の横は一つ空き　一甫
座蒲團を二つに折つて話し込み　香林坊
落し主わからぬ鞄重たそう　生水
進級も馘も鞄の中にあり　嶺泉
歡聲が擧る鞄のチョレート　伊大古
改札の火鉢へ街の風が吹き　若桑女
押びんを見つけてほつと子を放し　林笑
押びんで間に合はしけり遮斷幕　一甫
押びんで申譯ない背像畫　嶺泉
湯上りの出られぬ所へベルが鳴り　一夢
二度三度ベルを鳴らせば犬の聲　紅天
ベル押して威張つて見たい課長さん　湖心

ベルのある家計りなり　若栄女
ベル押せば櫻折々散りかゝり　香林坊
小休止煙草千切つた奴を吸ひ　南甫
戰友へ恩賜の煙草いたゞかせ　一夢
汗の手で一服吸へと金鵄出し　茶堂
一本を番號順に兵はのみ　一甫
有難や煙草の袋見つけたり　愚心
乘車口未練の煙草捨てゝ乘り　同

川雑　**津山支部創立句會**（岡山縣）
三月十五日　一將報

一國へＡＢＣＤ把になり　兒朗
堅石へ妻は非凡な力見せ　天風
腕角力どちらも顔が赤くなり　向洋
力こぶたゝいて見せる老ひた父　鯉遊
遺家族へ皆んな力をかす强さ　撚石
あつけなく投げて力が拔けたやう　燦太郎
意氣と熱、力で勝つた進軍譜　菁江
子は育つ明日も努力を惜しむまい　久米雄
腕力で打ち勝つた夜を淋しがり　菁嵐
もう一度父に會ひたく默禱し　蛙柳
默禱の瞼あの日の父が見え　吟平
默禱に銃後頼むの聲がする　白鳳
默禱に暫し聖なる室となり　光玲
默禱の瞼にうかぶ戰友の顔　香考
默禱にしみ〴〵思ふ國の幸　菁江
子は兵に夫婦寡默な祈りもつ　一將
默禱に應へて餘りある戰果　青嵐
增産の乙女は春に憧れず　一將
外套が荷物になつた春の風　光玲
明日知れぬ征野を照らす朧月　久米雄
春の池に影を映して一機行く　天風
草餅の香り今年も無事な母　一進
春の家ラジオ許りが鳴つてをり　某人
金槌かぬくもつてゐる春の樣　路郎
雜炊の匂も春のものとなり　紅陽
牧人の高で自炊の膳が出來　斗月
自炊してみて女房の有難さ　省三
新妻に自炊の體驗聞すなり　蛙柳
買つて來た儘で置かれた自炊器具　久米雄
一輪差の横で自炊の豆が煮え　同
自炊また配給米があまりかけ　同
自炊今日滿點といふ汁が出來　蛙柳
仲人の重荷が下りた酒の醉　白鳳
世話甲斐を喜ぶ今日の此成果　一進
世話役は非難されつゝ又推され　撚石
世話役の氣を揉んで居るプログラム　某人
炭籠を委せ世話役座を外し　山月
配給日だけ世話役の喜ばれ　白鳳
世話役を今度は止める氣に固め　吟平
世話役の机の上は亂れてる　紅陽
歡迎の子を抱上げる歸郷の日　一將
歡迎へ笑顔が見えた汽車の窓　某人
歡迎を受けるカラーが眞白し

阪大川柳會（大阪）
四月十七日　利生報

母校出を課長にあをぐ新入社　柳秀
時の人母校に立つてひとくさり　方正
たつた一人の次官を出した母校なり　栞
母校いま一點あげた甲子園　たけを
軍神禮讚母校の名にもふれ　利生
勤勞員母校の話から始め　栞
ハイキング妻へ母校を指さしぬ　柳秀
祝電一本母校も手拔からず　たけを
榮轉をキッチリ母校へも知らし　春巢
講演に母校へ臨むモーニング　柳秀
出征は母校の庭ではげまされ　利生
船長を誡にして衝突けりが付き　青一路
母校から來る通信は寄附のこと　柳秀
母校への寄附に苦しい生活向　利生
衝突をハラ〳〵させて出削持　同
衝突を未然に防ぐ母があり　柳秀
衝突で死にましたとは書いてなし　利生
アッと云ふまに案の定衝突し　路生
奇蹟的と云ふ衝突の記事に入り　青一路
衝突を覺悟で次官に就任し　同
衝突を避けて淋しい親心　柳秀
衝突の事故を見てゐる懷手　同
衝突もせずに白旗をかゝげて來　利生
どうせ衝突ですと女氣が强し　柳秀
衝突で同名異人だと判り　路郎
衝突を春の二階の窓から見　同
姑は折れず新妻なほ折れず　同

松坂倶樂部川柳會（大阪）
三月二十一日　白面人報

孫娘もうおてまへも心得て　孤蓬
祖母ちやんに今度は幽靈教へられ　同
初孫の名で家中が少しもめ　聖司
坊ん〳〵と言はれて孫の蒲柳型　香林坊
孫の死へ栗のつきぬを慨いてる　石鹿
押しだけで生きて淋しい五十すぎ　孤蓬
科學への道だ我慢じやありません　同
やせ我慢町會長を引受ける　香林坊
我慢强い父の手の皺顔の皺　同
清貧と稱し自ら慰めて　石鹿
おちいちやんやつと兎が一つ描け　孤蓬
占領のところでチョーク折れた音　香林坊
白墨の走る音だけしきり也　石鹿
服につくチョークの粉は彈じかれる　白面人
消すのには惜しいチョークの字が躍り　同
告知板チョークなか〳〵見當らず　同
解說のしまひにチョーク投げる癖　路郎
先生の似顔チョークの屑で描き　同

四月五日

腹痛で寢ては職場へすまぬなり　博也
子の胃病親もひもじい思ひする　美奈子
お通夜して胃病の藥聞いて來る　白面人
諦めずラストを走る三周目　博也
せめてもの慰めすべつた人かぞへ　聖司
淑髮と云ふてやつぱり鍬をあて　香林坊
お諦めなはれと女將猪口をさし　石鹿
雲水のまだ諦めた顔でなし　孤蓬
諦めた人が時局の波に乘り　白面人
靴下の穴も氣にせず二十一　博也
サーカスは便所の穴もうめて行き　久行

三明寺穴居の跡を見る

堅穴へ三千年の雨が降り　香林坊
大阪と云ふとこ穴を掘りちらし　同
穴あけてみるとは知らず娘やり　石鹿
節穴は伸び縮みして覗かれる　白面人
彈痕の穴にすみれが咲いてゐた　孤蓬
穴埋めの金とアイスは知つてゐる　同
穴かがりの方は女教師引うける　同

有恒倶樂部川柳會（大阪）
三月二十四日　鋭々報

特大のパンツを探す肥り過ぎ　杜丹
太つちよへ心臟の事觸れまいぞ　青美
ビール腹彼も亦二合三勺か　同
又太りましたと女將汗を拭き　波郷造
人力に敬遠された肥り過ぎ　同
肥り過ぎ柄の事など言はず買ひ　至藝瑠
腹が出て來ても課長にならず居る　同
門衛は肥り方だけ社長に似　鋭々
金の事にデブ無關心にはあらざれど　同
怒る事がないやうにデブの思はれて　同
女中痩せたし奥樣太りたし　波郷造
ヒスるほどに美人ます〳〵痩せ給ひ　鋭々
文學を話すといふ妓痩せて居り　同
瞞たけて在はし濕布の細い首　同
探偵社ポケットマネーもせしめてる　杜丹
可愛い遠足ポケットを押えて走り　波郷造
改札であらゆるポケッさぐつてる　青美
喫ひかけをポケッにさぐる小休止　同
ブラクリのポケットの位置氣に入り　至藝瑠
ナス袋だけは兎も角ポケットに　同

東日
スピーサ
ワイシャツ
婦人服地
其の他
大阪市北浜二丁目 片倉ビル
電話北浜(23)六六三六番(4)

安産のために
姙娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。
片瀬醫學博士述「安産のために」冊子呈上
ワダカルシューム錠
楢林醫學博士 推奬
片瀬醫學博士 監査
大阪道修町 和田卯助商店

ポケットの饅頭無惨に押し潰れ　銳々
決戰下の男もポケットの色ハンカチ　同

四月九日

特種へ受話器を投げて飛んで行く　青美
特高も記者も乘込む門司の朝　同
老記者は世界を呑んで筆を執る　同
如才なく記者同郷を云ひ立てる　波夢造
鷹揚に女優の會釋受ける記者　同
ハツハツハツで逃げる記者は承知す　同
溫泉地記者も名士も同じ宿　銳々
令夫人記者を眼下に見下しぬ　同
女は女の味方ですと婦人記者　同
拾圓が見えず屑籠二度探し　同
屑籠を自分で捨てるタイピスト　青美
紙屑が今日の人出を物語り　波夢造

警察病院川柳會（大阪）

四月二日　正柳報

すりつけるやうに近眼字書を引き　道朗
近眼へ秀才型とうぬぼれて　正朗
絹服と呼ぶ古本のしまひやう　湧三
虫ついた古文書もあり舊家です　同
古本に恩師の著書を見つけ出し　正柳
古本屋ばかりあさつて主居なり　同
古本を飲んだ時代を懷しみ　道朗
古本の蚊のはさまれて居る頁　吉郎
嬌羞の眼は觀音樣に似て細く　湧三
土筆摘御玉杓子も捕へて來　正柳
口先に乘つた因果と諦める　雨聲
口先は闇なと知らぬ風で居て　湧三
ガンヂーもその口先に乘りません　浩
口先でちよい〳〵小選せしめて居　正朗
米英も口先だけは勝つと云ふ　吉郎
口先は悟り開いたものゝやう　柳峰
胃癌だと誰が云ふたと慰める　湧三
口先でもうかへらない大晦日　路郎
口先のうまさが親子ほど違ひ　同

徐州川柳會（徐州）

二月二十一日　ひろし報

落下傘南洋の空に花と咲く　多々良
密雲を拔け待望の敵に遭ひ　雨町
六機目を落して還る片翼　同
空中戰一機歸らぬ空仰ぐ　玉人
增稅に苦情云はさぬ老區長　ひろし
增稅へ積極的な論を吐き　三草
增稅を苦にせぬ息子よく動き　ひろし
增稅に一家擧つた働き手　玉人
陷落の第一報を旅できく　雨町
選擧する人もされたいやうな顏　三草
官選へ街の話題が一つ增え　玉人

川雜三池染料支部句會（大牟田）

四月九日　蝶人報

極樂を信じて今朝も杖をつき　抱逸
老骨を提げ國難の中に立ち　國夫
養老院日向ぼつこを日課とし　抱逸
年寄りと覗まれまい野良に立つ　波人
一萬圓當つた頬をつねつてみ　一葉
一萬圓寄附の活字も羨し　波人
夢にみる一萬圓は逃げまわり　鬼水
一萬圓目指して職場休まれず　平人
働いた汗を知つてる一萬圓　初舟
退職金一萬圓の資格を得　路村
傳說の蟹だけ捕らぬ三池町　子盛
山清水汲めば小蟹が身構へる　波人
潮湯宿窓から蟹が遊びに來　抱逸
入學の三日つづいて泣いて來る　梅春
入學を祝うて空も高く晴れ　藤樓
入學の背に嬉しいランドセル　天風
入學の兒に太すぎる兒の服　同
ハナ、ハトを寢言で待つたヨイコドモ　一葉

社關係の人々

主幹

麻生路郎

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　藤村作　藤本卯之助　頴原退藏　淺田一　末弘巖太郎

客員

鳥山一歩　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　鶴井晟修　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　高尾亮雄　生方敏郎　窪田銀波樓　山本雨迷　安川久留美　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚

不朽洞會員

橋本綠雨　高橋かほる　福田山雨樓　西田艸樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　寺井鋭々　大西八歩　高澤一浪　戸田孤蓬　石井白面人　川田美根子　中島生々庵　戸倉曹天　小畑自有浪　古川風竹　前山北海　古川麗花麗　岩崎山石　藤井友郎　米本貫志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　西川青美　黒川紫香　丸尾潮花　岩橋双虎　岡田某人　岩崎松代　酒井斗風　北川春巣　布施筑川　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾棄　櫻川不水　田中風葉　中原銑人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住瀟潮　清水友帆　清水史路　清水白柳子　西川愁水　中内翠芳　井上湧三　河野夜玉　津路紅多呂　浪玲之介　野口柳太　谷川綠風　小林文月　酒井美知夫　飯尾害與史　小川恒明　阿萬萬的　岩崎水虹　國弘半休　矢野蕭堂　鈴木石鹿　夷一笑　月原宵明　高田抱遥　篠山籌彦　石原伯峯　植山九天　市村素香　田村孝之介

★

姫田夕鐘　村松夢裡　市場沒食子　吉田水車　妹尾八九瀟　須崎豆秋　春元紀太　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　原史風　正本水客

支部と幹事

道頓堀支部（大阪）萬よし　函館支部（函館）晟修　梅田支部（大阪）鮎美　綾川支部（島根）綠之助　鳥取支部（鳥取）鐵州　松山支部（松山）耕一路　天王寺支部（大阪）八九瀟　鶴町支部（大阪）双虎　御池橋支部（大阪）夢裡　松江支部（松江）將雄　大蠻局支部（大阪）柳太　西條支部（愛媛）英賀夫　城南支部（大阪）申仙　今治支部（今治）文庫　川雑光笑會（大阪）里十九　竹原支部（廣島）芳郎　廣島支部（廣島）久米雄　豐中支部（豐中）紫香　下關支部（下關）牛休　北鮮支部（羅津府）美笑　蒙彌支部（張家口）柳路　上海支部（中華）天作　鐵道病院支部（大阪）春巣　渚支部（大阪）湊万　四ッ橋支部（大阪）翠芳　布哇支部（布哇）麗花麗　堺支部（堺）角堂　岡山支部（岡山）九坡　尼崎支部（尼崎）美知夫　日和佐支部（德島縣）賢次　三池染料支部（大牟田）蝶人　大洲支部（愛媛縣）椋影　小郡支部（山口縣）井蛙　熊本支部（熊本）水源　仁多支部（島根縣）一聲　神津支部（大阪）香林坊　津山支部（津山）一將　明石柳次　水谷竹莊

募集

第十九卷 第七號課題

五月廿日締切（十句以內）

占領　姫田夕鐘選

硯　長野文庫選

第十九卷 第八號課題

六月廿日締切（十句以內）

實印　須崎豆秋選

校長　西尾棄選

第十九卷 第九號課題

七月廿日締切（十句以內）

形見　高橋かほる選

易者　杉原大研子選

毎號募集（毎月五日締切）

近作柳樽（雜吟廿句）麻生路郎選

川柳塔　麻生路郎選

同舟近詠

各地柳壇（會報）

文章（評論研究感想吟行漫文漫書）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雑吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書（川柳雜誌原稿）と封筒に朱記の事。

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

規格判B列5號

川柳雜誌 第十九卷第五號

毎月一回一日發行

定價

一冊 ㊥ 金二〇錢（送料一錢）

半ヶ年・六冊 金一圓八十錢（送料六十錢）

一ヶ年・十二冊 金三圓六十錢（送料十二錢）

外國送本には海外郵送料實費の加算を乞ふ

御註文はすべて前金で願ひます。振替（大阪七五〇五〇）又は小爲替を御利用願ひます。御註文は何月號よりと御指示願ひます。轉居又は改號等の節は舊新併記の事。

昭和十七年四月廿五日印刷

昭和十七年五月一日發行

禁無斷轉載　本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

廣告　本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社廣告部へ御一報下さいますやう。

發行所　川柳雜誌社　大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）　振替大阪七五〇五〇　電話土佐堀三三三三番　八一六四三番

編輯兼發行人　麻生幸二郎　大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地

日本出版配給株式會社　東京市神田區淡路町二丁目九番地

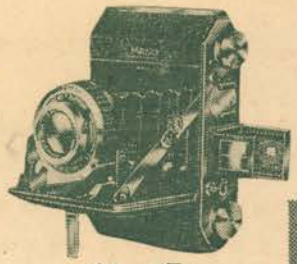
會員番號　壹四五〇八

★毎號、戰線の勇士に送られたい方は部隊名をお示しの上本社宛に御申込み下されば郵税を奉仕して直接發送致します。

送本者　住所　氏名

セミ・ミノルタ

代表的國産カメラ



プロニー
16枚撮り

II型F4.5付
¥117.00

F3.5付
¥141.00

距離計
¥21.00

(カタログ呈
要郵券十錢)

淺沼商會大阪支店

大阪市南區順慶町四丁目
電話船場905・1905・1396・5095番

ガラス壜代用 紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地

二葉屋商店

電話事務所用 天下茶屋 五八八〇二番
工場用 同 五八八〇三番
五八〇四番

錬成コース

御陵巡拜コース
楠公史蹟コース
岩湧山コース
お菊松コース
紀泉アルプス

大阪府指定

南海電車

SENRYU ZASSHI No・220
Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十七年四月廿五日印刷納本・昭和十七年五月一日發行

川柳雜誌 第二二〇號 ㊟定價金三〇錢 送料壹錢

化膿症

球菌に對し直接の殺菌作用を發現し、身體細胞に球菌抵抗力を賦與するが故に化膿菌・肺炎菌・感冒菌・淋菌・等總て球菌に原因する諸症は本劑の服用により最も短期間に快癒す。を以て醫界に信賴純度第一、第一のテラポールさる、

膿瘍・面疔・癤・創傷化膿・蓄膿症・歯槽膿漏・中耳炎・感冒・膀胱炎・扁桃腺炎

100錠 30錠 試錠

THERAPOL 20 TABLETS

テラポール錠

第一製藥株式會社
東京市日本橋區江戸三丁目
大阪・奉天・大津・高岡・
海口

TII—1